

烈
祖
成
績
十

烈祖成績卷之十

慶長五年（一六〇〇）九月
至其年十二月

慶長五年九月十六日、神祖藤川の営を出で佐和山南野並東山に陣す。家忠日記・徳川記・

関原記大全 中村一栄・横田宗治を召し、大垣に至り諸將と城を攻む。豊臣秀秋・井

伊直政・田中吉政・黒田長政・藤堂高虎・石川左衛門佐等二隊と分け為し磨釘嶺

鳥居本より進み佐和山城を攻む。神祖正法寺山に移る。正法大全作正寶。国音転訛。創業記

作正覚誤。今拠江州地名訂之 池田輝政・徳永法師寿昌・横井伊織父子三人多藝に屯し牧田

口に出で長束正家・安国寺惠瓊を追撃す。石卯餘史曰、金森法印・市橋下總守・横井伊織追撃惠瓊・

長曾我部盛親攻之。今従大全 惠瓊の宰島十郎左衛門衆を励まし戦はんと欲するも衆皆烏合

にして一時に潰走す。正家の兵松田金七多力にて健闘す。鉄搭を以て我兵七八人

を拘取し之を刺殺し遂に戦死す。惠瓊・正家皆敗走す。大全・関原合戦誌・餘史 寿昌・

伊織父子級を獲り神祖の覽に磨針嶺(釘力)に於いて備ふ。餘史曰、獲一百四十級。大全不書數今從之。

神祖特だ横井作左衛門の戦を褒む。「脱力」誌・餘史本書有松野主馬。抛大全主馬自引兵下松尾山不復

出戦。見上文故不取。是に先んじ、毛利輝元大坂の弓銃隊長長谷川右兵衛・赤松上總介則

房を遣はし之を援く。則房、兵部少輔義祐子右兵衛箭書を秀秋の陣に射、内応を為さん

と欲す。隱岐守、之を覺り之を殺さんとす。右兵衛水竇あなより逃げ秀秋の陣に奔る。

篝尾の守将山田上野、使を牙城に馳せ援を乞ふ。隱岐守、赤松則房をして之を援

けしむ。

其夜上野出奔し故に則房兵を引き還る。

十七日、井伊直政、城後の水道を繞り出で城を攻め之を破る。めく。大全直政作田中吉政。今從

家忠日記・合戦誌・餘史・松栄紀事。火を縦ち楼櫓はなを焚く。や。城兵おそ恇れ擾ぎ拒ふせぐを得ず。隱岐守

及び正澄、使を直政の陣に遣はし自殺以て城兵の死に代へんと請ふ。直政之を本

營に告げ神祖之を許す。隱岐守及び正澄・右近・下野守等皆自殺す。創業記・家忠日記・

徳川記・大全・合戦誌・餘史 三成の宰士田桃雲、三成の妻を殺す。火薬を設け隠岐守以下の屍を悉く焼き然る後に自屠し燔死す。餘史曰、隼人正亦自殺。合戦誌曰、隼人正年十三、出城進

至高野山。寺僧捕之送京師処斬。未知孰是。又按ずるに、餘史・関原軍記並び曰はく「下野守の子宗二郎、尾藤善四郎と出で闘ひ首級を獲る。二人交臂し（腕を組む）火に赴き死す」と。合戦誌曰、二人出闘潰圍遁去不知所之二説不

同。附以備考 福島正則愛智川の上に陣す。ほとり戦を觀、何する無く城陥つ。故に兵を進め

ず。神祖、石川康通・内藤信正・西郷正員して城を取らしむ。秀秋・直政兵を引き還る。家忠日記・合戦誌・餘史・慶元記・松栄紀事 秀秋及び黒田長政の兵を分け之を成る。

大全 神祖陣を永原に移す。合戦記（誌）・関原軍記作平田山誤。今從創業記異・大全 田中吉政を召

して曰はく「佐和山城陥ち賊魁三成城中に在らず。卿、江州の地理を諳しる。宜しく江北に至り蒐羅しゅうら（搜索）し之を逮捕すべし」と。吉政命を奉うけ膽吹山麓を圍み之を

遍さく索す。家忠日記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事 加藤嘉明東征に出で従ふ。其弟内記忠明

及び其臣堀部主膳・黒田九兵衛・佃次郎兵衛等をして松崎城を守らしむ。諸書作奥崎

今從大全 初め敵將大阪に在り軍事を會議す。石田三成、毛利輝元に謂ひて曰はく、「卿、大藩なり。昔時むかし六分一殿たりと雖へども以て過ぐる無きなり。按ずるに、將軍足利義滿公

の時山名陸奥守氏清・播磨守滿幸等十一州に封ず。時の人之を六分一殿と謂ふ。輝元も亦十州を領す。故に三成然云

ふ隣国の諸將与ともに敵たる者無し。宜しく兵四五千を伊豫に遣はし、以て加藤左馬助・藤堂佐渡守管内の地を徇めぐるべし」と。輝元曰はく「我兵大阪に在り。四万余四国に分け遣はすは掌を反すが如く易し。然れども加藤・藤堂皆小藩なり。留守の兵跳梁侵軼しんいつする能はざるは明らかかなり。儻もし黒田如水・加藤主計頭、内府に党し拳兵し我に托(抗)せば則ち鎮西の諸將必ず其患を被る。其勢周防長門の兵を以て之を救はざるを得ず。見るに兵多しと雖へども四国九州に分け遣はすは殆んど不可なり」と。三成曰はく「然らず。縦たとひ如水・主計頭関東に属すと雖へども大阪の質を棄つる能はず。内府の責を免れ城に拠り自守するに過ぎざるのみ。当に此時見兵を分け遣はし隣国の諸將と之を撃つべし。中津・熊本二城輒ち克つべからず。

旬を逾え月わた弥り師必ず老ゆ（軍は疲弊する）。其勝ち易きを撃ち以て兵威を壮んにするに如かず。此れ策の上なる者なり」と。諸將皆其謀を善しとす。大全 輝元、穴戸善左衛門備前守弟・曾根兵庫・村上掃部・野島内匠等をして兵三千五百を將合戦誌る。作二千從今大全 舟にて伊豫に至り松崎城を攻めしむ。土人平岡孫右衛門・其弟善兵衛之に叛応し郷導を為す。城を距つること三里。

是日、満浦に泊る諸書満作三津、国音相通。今從大全 善左衛門謀りて曰はく「城中勇士多く之を攻むるは未だ稗（猝）（すばやく）抜に易からず。今公命を以て之を制し之を得るは難からず。且其虚を觀るなり」と。乃ち使を遣はして曰はく「吾軍秀頼公の命を銜（ふく）み兵を將る此に「」。左馬助殿東征に従ふ。願はくは城を借り以て吾兵を屯せん」と。忠明勇にして謀有り。之に給（あ）きて曰はく「左馬助在らずと雖へども處守の臣敢へて公命を重んぜざらんや。宜しく城を出で避去すべし。然るに土人の妻子皆城中に在り。明日当に之を城外に移し灑掃整頓し然る後に城を授くべし」と。因

りて井上加之助を以て使と為し満浦に遣はし亦敵の虚実を偵ふ。うかが

其の夜、忠明銳兵五百を率ゐ満浦を急襲す。加之助還り諸これと途に遇ひ報して曰はく、「敵兵甚しくは多からず。隊將漁家に營し士卒海浜に陣す。部こ悟整はず撃ちて之走るべきなり」と。忠明喜びて更に（夜更けに）軍を潜め満浦に至る。東西に火を縦はなち之を撃つ。敵陣大いに擾ぐ。善左衛門身を挺し出で闘ふ。加之助戦死し其余頗る死傷有りと雖へども忠明縦横に奮撃し之を破る。敵將曾根兵庫・村上掃部・野島内匠等を斬る。善左衛門山麓めぐを循りて走る。

黎明、忠明兵を収め城に還る。合戦誌・餘史・紀事在異同今從大全

十八日、神祖八幡山に陣す。大全。合戦誌曰、是日神祖奔（発力）平田山。福島正則・藤堂高虎・池田輝

政為前軍、黒田長政・細川忠興・京極高知為二軍。浅野幸長・堀尾忠氏・寺沢廣高為三軍、井伊直政・本多忠勝繼之。

神祖為後拒。隊伍嚴整。抛大全載、是日賜正則・長政二人書則非是日之事。蓋佐和山城陥移陣永原時事也。故今闕疑

不書 大垣羅城守將秋月種長・相良長每・高橋元種相謀り使を遣し福原直孝・垣見家

純・熊谷直陳・木村宗左衛門を軍事を議るを以て誘致す。直孝変を覺り来ず。宗左衛門も亦之を疑ひ還る。其子傳藏、家純・直陳を止むるも二人既に第二城に往く。種長・長每・元種兵を伏せ直陳父子・家純及び従者を撃ち殺し二十人ばかり皆死す。宗左衛門父子変を聞き將に備中丸に入らんとす。三將兵を遣はし急ぎ之を追ふ。父子力戦して死す。慶長記・徳川記・慶長一統記並曰、宗左衛門亦被誘殺。合戦誌曰、某氏家伝

宗左衛門父子亦被誘殺於二丸。然父力戦而死請(諸)書有明証。雖家伝不可尽信其說是ナリ。今從大全・戦誌 長每、

其宰相良兵部をして五人の首を提げ開門し之を示さしむ。麾を揮ふこと約の如し。水野勝成、其兵鈴木與八郎を遣はし旗を持ち入城せしむ。松平康長・中村一学の兵其関原の戦に会せざるを憤り銃矢を争ひ放ち城を攻む。三將其違約を責め聴かず。之を攻むること愈急たり。勝成怒りて曰はく「勢已に此に至る。人をして我先んぜしむべからず。」と。直に進み城を攻む。康長、士卒を諭し戦を止む。一學の兵も亦退く。事遂に平らぐ。勝成・康長、三將と議り進み牙城を囲む。直孝

堅守し之を拒ぐ。我兵頗る死傷有り。 大全曰、丹波守一學之兵争功欲入城。城兵困鉄門嚴拒之。故引

兵還。今従家忠日記・水野勝成事記・合戦誌・餘史 細川玄旨、田辺城を固守し小野木公郷等と相

持^じすること六十日。敵将関東に帰心する者多く、或は放銃に鉛弾を用ゐず。故に

其事に緩^{かん}たり。 大全 玄旨必死を決意し密かに使を京師に遣はす。家世所伝の二十一

代集及び源氏物語を禁廷に献じ和歌一首を以て副^そふ。 合戦誌・餘史・慶元記・細川家伝録○大

全曰、智仁親王以大石勘介為使遣田辺城。使諭玄旨献家伝古今集・源氏物語于禁中。玄旨奉命副以二十一代集付使者。

其余所秘歌書蔵于匣（てばこ）中副和歌一章贈烏丸光廣卿。 附以備考 後陽成天皇、玄旨敗死せば則ち

歌道廢絶せんことを憂へ、徳善院玄以に詔し和議を修せしむ。玄以、前田主膳正

茂勝をして勅使参議藤原實條を田辺城に導き勅諭すること再三。 大全曰、以富小路・中院

二人為勅使。合戦誌・餘史・松栄紀事並云、三條大納言。今従之。堀公卿補任、實條此時為参議。諸書堀後年所進官

書之耳。茂勝、玄以養子。合戦誌佐宗利今従細川家傳録 大全・合戦誌・餘史曰、八月三日献歌書。合戦誌・餘史曰、

九月二日勅使至。 附以備考

是日、玄旨已むを得ず勅を奉^うけ城を出で龜山城に入る。家忠日記・合戦誌・餘史・慶元記・

松榮紀事皆云、入高野山。而不日。大全曰、九月十二日玄旨出城。今從細川家傳錄小西行長、関原戦に敗

れ膽吹山の東糟賀郡邑に匿る。相川村の禅僧林蔵主之を^{もと}見め得たり。合戦誌曰、相川村

里長。大全曰、禅僧破戒還俗者。諸書皆云、禅僧。今從之行長其の免れざるを知り之に謂ひて曰は

く「吾は小西撰津守なり。汝吾を捕へば必ず重賞を得ん」と。林蔵主自裁を勸む。

行長曰はく「我耶蘇宗を奉ず。其法自殺するを得ず」と。林蔵主之を捕へ巖手城

に至り竹中重門に告ぐ。重門護送し八幡山營に至り之を献ず。神祖黄金十枚を林

蔵主に賜ひ之を賞す。村越直吉をして行長を幽せしむ。大全及関原軍記云、賜黄金百両。餘

史云、黄金百枚。蓋百両之訛。今從奥州軍記・徳川記・合戦誌・慶元記・松榮紀事関原戦に敗れ、毛利秀

元兵を引き南宮山を下る。磨^ハ（針カ）嶺を歴是日佐和山に至り本營の西を過ぐ。

兵一騎、本營より馳せて来る有り。秀元の宰天野六郎左衛門曰はく「此れ内府の

使者なり。其語を聞き宗社（^{ほく}國家）の安不（安否）をトすべし」と。既にして使者至り

神祖の慰勞の語を伝ふ。一軍皆悦ぶ。使者即ち永井直勝なり。大全係十五日、関原戦敗之

後。今従毛利家記・松栄紀事 直勝問ひて曰はく「福原越後も亦此に在るか」と。秀元曰は

く「我に先んじて去る」と。直勝帰り状を神祖に告ぐ。松栄紀事本書曰、秀元率敗兵遇神祖

營前云云。神祖縦之使去。按ずるに、秀元兵を按（おさ）へ觀望し未だ嘗て接戦せず之を敗兵と謂ふを得ず。廣家已

に款し神祖に其情の非なるを亮知す。故に之を繼（縦）つなり。故に取らず 安国寺恵瓊潜かに膽吹山を

出で秀元の營に匿る。是に至り秀元に留め書きし亡去す。其略に曰はく「野納（私）やのう

厄運に罹り將に自殺せんとす。君の救護を頼み今日有るを得。今内府の營前を過

ぐに之を誰何する莫し。意心に足下も亦内府に通款するか。若し然らば則ち野納

陣中に在り必ずや足下を累はさん。故に亡去す」と。秀元人をして之を追はしむ

るも竟に及ばず。毛利家記曰、恵瓊在膽吹山以僧 首座為使請従秀元。秀元不忍捨之匿之。陳（陣）中根来（ね

ごろ）山伏普門院長于鳥銃。秀元召隷麾下。此至八幡山普門院勸恵瓊使逸去。恵瓊請秀元以普門院為先導駕舟赴北近

江、間行至鞍馬山。拠此則秀元縦之使去也。智（留）書蓋在此時。二説未知孰是。今従松栄紀事 福島正則・黒

田長政、秀元を遏めんと欲し間道を歴、秀元の先に出で仮館を構へ以て之を享す。

吉川廣家・宍戸備前守の至るを得、相与に秀元に留滞を勧めんと欲す。其実は以

て質と為さんと欲するなり。秀元の膂力人に邁ぐ。佯り酒を被る（酔う）と為し正

則の臂を紛（ねじる）りて曰はく「近日当に大阪に会ふべし」と。袂を奮ひて去る。

二人終に之を留むる能はず。毛利家記作長政一人。曰、長政構館于膳所湖水之辺出接秀元。秀元扼長政之

右手。疼痛累日。未知孰是。今従大全

十九日、神祖、草津駅に陣す。後陽成帝勅し使を遣はし凶賊を平ぐを賀す。神祖
拜謝して曰はく「姦臣秀頼の幼弱なるを欺罔し妄りに兵革を興こし天下を擾乱す。

而れども諸將勦戦し群兇を誅夷す。諸国の残党旗を巻き来降す。四海昇平（平和にな

る）に属するは指日にして定むべし」と。家忠日記・合戦誌・餘史・慶元記・松榮紀事、神祖答勅之

言拠大全 其の余公卿・僧徒絡繹（次々と）来賀す。神祖、池田輝政・福島正則・浅野幸

長をして先に京師に往かしむ。禁闕を警衛し豊臣秀吉夫人の高臺院に起居す。三

將連名にて通衢(つうく)（街角）に榜(榜)（立札）し盜賊寇鈔(こしゅう)（略奪）を禁ず。大全、有黒田長政為四人。家忠

日記曰、関原之戰雖諸將皆有功而正則・輝政・幸長其功挺衆。故命之。徳川記・合戦誌・松栄紀事亦書此三人。今從

之京師の商人中島清延・後藤莊三郎光次・亀屋永仁、榜を奉じ遍く京師に告す。松

栄紀事 是に先んじ、神祖、山本新左衛門・大久保市十郎を以て使と為し 合戦誌作大久

保助左衛門一人。從大全 関原戦の期を世子に告ぐ。連雨に水漲り木曾川を渡るを得ず、

滞留すること三日。二日を前にし信州妻籠に之を告ぐ。合戦誌云、是月十七日、至妻籠。今

扈之 世子之を(聞)間き道(信)を信し兼行す。然れども期に及ぶ能はず。神祖憚(よそひ)ばず。

是日、世子、草津に至り本營に謁す。神祖疾と称し出で見えず。世子退き伝舎に次(やど)

る。家忠日記係二十三日、合戦誌係二十一日。餘史係是日。而云、謁見神祖。皆誤。今從大全 榊原康政・大

久保忠鄰・本多正信・酒井宮内大輔忠勝・本多忠政等皆謁(す)を晋むを得ず。井伊直

政諸將に伝命し、退き舎に就かしむ(宿に下がる)。且厲声して曰はく「世子逗撓(とつどう)（手間

どる）し戦期に会せず。諸君も亦羅(らい)（欄外に「罪」）無きを得んや」と。諸將皆神祖の威

敵を憚り語無くして退く。独り酒井忠利のみ直政の意を揣りはか以為おもへらく、忠吉は其の女婿なり。関原の戦に新たに武功有りと聞く。故に世子の濡滞を挙げ以て忠吉の功勞を彰かにすと。乃ち直政に謂ひて曰はく「世子戦期に後るるは以て上田城を攻むる故なり。必ずしも内府公の怒に触れず。而れども子し独り揚言し以て之を抑す。其意何如いかん」と。直政曰はく「吾、他有るに非ず。唯だ天下の人口実を藉かり為すを恐るのみ」と。忠利曰はく「世子の過ち有るを縦ゆるすとも内府公怒を蓄ふ。子し寵臣たり。宜しく調停弥縫びほう（まとめる）し皆謁見の美よみを以てすべし。此に出づるを知らず。反り譏議を為す。若し又抗言せば則ち吾志決せり」と。促膝しよく（膝つきあう）諛しよく責せめる（せめる）す。意は交刃して死するに在り。本多康重・牧野康成・高力忠房等之と和解す。時の人皆謂おもふに、兵部少輔の威權烜赫けんかくたり（あきらかだ）。人敢へて吾を支ふる者無し。備後守今日舌戦し往時の戦功より勝ること多しと。大全本書曰、忠利駿州持舟・

信州丸子・尾州蟹江之戦功世所共知故人称之。神祖、世子亦器重之累進為河越城兵、自食邑三千石增至三万七千石 本

多正純、神祖に白して曰はく「逗撓し期を失するは世子の過に非ずして全て臣父佐渡守の所為に在り。願はくは佐渡守を罰し、以て世子の過ち無きを彰かにせんことを」と。神祖意釈く。合戦誌・餘史並曰、榊原康政入見神祖上諫。神祖納之。抛大全扈從世子諸將皆

不許謁見。康政何由得諫。鷲峰文集榊原康政碑亦無其事。合從大全及本多系図付録

二十日、神祖大津駅に至り此に留すること数日。合戦誌曰、二十一日宗（発）大津。今從家忠日

記・大全・松栄紀事

是日、世子神祖に謁見す。大津を発し伏見に赴く。家忠日記係二十三日注于上文。合戦誌曰、

二十五日謁見伏見城。今從創業記考異及大全 神祖、奥平信昌をして京師の政令を掌らしむ。加

藤喜左衛門正次・板倉勝重・大久保長安之に従ふ。徳善院玄以の吏松田某・小池

某これ焉に隸す。信昌明年春に至り京師に在り。合戦誌・餘史・松栄紀事。按ずるに、大全、此の事、

及び正則・輝政・幸長を遣はし京師を警衛するを以て、並び十七日に係く。神祖永原に在る時下す。今家忠日記に従

ふ 本願寺光寿来謁す。神祖面し一寺を創建するを許す。大全光寿廢興之由詳。見上文七月 葦

浦観音寺小野總左衛門を以て大津町奉行代官と為し、商賈を通じ農桑（農業と養桑）を謀む。観音寺、大津城を攻むと雖へども驅逐せらるるは其意に非ざるなり。故に神祖之を用ゐる。大全・合戦誌・餘史本書曰、観音寺天台宗僧總左衛門大津市人号十四屋 松崎城兵黒田九兵衛・佃次郎兵衛城を出で挑戦す。穴戸善左衛門、江原古壘に抛り出でず。加藤忠明、糺山を登り陣を張り相對す。善左衛門兵を出し禾を取る。忠明之を擊却す。敵兵数百久米如来寺に入り之に抛る。九兵衛・次郎兵衛之を急攻す。九兵衛鉛に中り死し、其余死する者多し。忠明兵を収め去る。

是夜、善左衛門江原山後を経満浦に至り湊山に陣す。忠明江原山に向かふに敵兵一人として在る者無し。進み湊山に至る。善左衛門関原の敗を聞き狼狽し安藝に還る。家忠日記・徳川記・大全・合戦誌・餘史○大全曰、神祖聞忠明之謀略大称賞之。明年忠明病死。神祖甚惜（惜）

之神祖、関を日岡嶺に仮設す。毎日近藤秀用・伊奈図書・加藤源太郎三人を輪らす。吏卒を置き往来を閱る。福島正則命を奉じ京師に赴く。図書番直の日、正則

其の臣佐久間佐左衛門を以て使と為し、旨を大津本營に取る。佐左衛門騎して関を過ぐ。吏卒之を尤とがむ。佐左衛門曰はく「吾、君君命(衍字)を奉じ本營に使ひす。何故に下馬するか」と。吏卒争起し棒を以て股を棒うつ。佐左衛門下馬し関を過ぐ。怒を抑へ復命す。正則の宰福島丹波に就き披訴して曰はく「臣折辱を面受す。願はくは告を賜へ。臣以て之に報す有らん」と。正則、其公を為し私を忘るを褒めて曰はく「汝亟やかに自殺せよ。三日を過ぎず吾必ず凶書の首を斬り以て汝の仇に報いん」と。佐左衛門喜びて自殺す。正則使を遣はし其首を齊ととのへ井伊直政の營に送る。直政大いに驚き状を本營に告ぐ。神祖、凶書を大津に召して之を訊鞫じんきく(きびしく問詰める)す。凶書素もとより知らざる所なり。直政旨を奉じ正則に報して曰はく「関吏使者を辱むるは凶書の所為に非ず。須らく関吏一二人を誅し以て其の罪を謝すべし」と。正則大いに怒りて曰はく「凡そ士卒過ち有るは皆隊主の罪なり。今之を凶書知らざる所と誘いいわけして其罪を輕断す。殆んど望む所に非ざるなり。且一言以

て佐左衛門を許す。中輟てつ（途中でやめる）すべからず。輟やめば則ち部下の士卒、我を以て食言（約束を違えてうそをつく）を為すとす。則ち今より吾命を用ゐず。而れば馭下（部下を扱う）の道を失す」と。必ず断髪遁世し、以て死者を弔ふを誓ふ。言甚だ暴戾（乱暴で道理に反する）にして勢測るべからず。直政神祖に白して云はく、「図書死せずんば則ち事必ず平せず。請ふ、死を賜へ」と。神祖敢へてせず（決して諾さない）。直政固く諫めて曰はく、「閣下図書に死を賜はずは則ち正則必ず拳兵し之を戕ころす。是れ反なり。然らば則ち反者を討たざるべからず。今大捷すと雖へども輝元大阪城に在り。島津・立花猶ほ未だ帰款せず。其余の鎮西・中国の賊徒山谷に逃れ竄かくる者勝あげて計かぞふべからず。変に乗りて起たたば則ち禍乱何に由りて弭やめん。願はくは枉まげて臣の言に従へ」と。神祖已むを得ず之に従ふ。直政、図書の營に馳せ至り諭旨す。図書悦びて曰はく、「此れ臣報恩の日なり」と。竟に自殺す。年二十八。時の人之を惜しまざる莫し。直政其の首を正則の營に送る。正則大いに喜び之に謝し事遂

に平ぐ。大全 合戦誌佐久間佐左衛門作小身（島）介之進。餘史無使者名。二書並曰、正則奉命赴京師、先池田

輝政而發遣介之進於輝政之營、告之。介之進過関脚誤触関吏之棒、関吏恐以棒棒脛。介之進抑怒復命曰、正則使之自殺齋其首送図書所、図書大驚斬番直吏六人首盛函榜其姓名送正則之營。正則不受曰、吾使者騎兵也。所送首步卒也。

吾不能以騎兵易步卒。遂還之。其意在必得図書之首。直政諫曰、云云。大全曰、直政言于神祖曰、正則矜功驕怒。今殺図書則威武以不振。請、臣隨宜処分。神祖不聽。終使図書自殺。二書所記使者之名不同而事實亦有小異。合戦・餘

史所記、神祖欲沽図書而直政固諫、使之自殺。事體固当然。今参考三書採其可者、從之

臣按ずるに、征西の諸將には福島正則其の効最大たり。然れども其剛腹自ら用

ゐ（自意に固執する）功（恃）持（きょうし）み驕恣（きょうし）も亦甚し。関吏其使者を辱（も）むるは固より隊主の罪

に非ず。伊奈図書不幸にして其の変に遭ひ関吏六人の首を斬り以て一士の死を

償ふ。亦た已むべからざらんや。関原合戦誌・石卯餘史書く所の六人の姓名未

だ必ずしも杜撰之を為さず（杜撰ではない）。但し神祖、図書を召し之を訊鞫（じんきく）す（きび

しく問いただす）。大全の説長たり（すぐれている）。図書関吏を斬るは或は此後に在り。

而れば正則必ず凶書を甘心せん（思い通りにする）と欲し、故に騎士・歩卒の説を以て之に迫る。必ず止むを得ずんば則ち凶書の家にも亦豈に騎士の以て匹敵すべき者無からんや（騎士に値する者はいたはずだ、凶書本人でなくても）。正則之を舍き論ぜず。必ず凶書の首を得而る後に自慊す（満足する）。豈に狼戾彊暴の甚だしきに非ざらんや。此時に当たり毛利輝元の勢日に窮蹙し正則の去就、韓信、漢の為にせば則ち漢勝ち、楚の為にせば則ち楚勝つの勢に非ずと雖へども、李懷光、奉天の変より激しく、將に呼吸の間に在らんとす。井伊直政の謀慮深遠たりて犯顔彊諫（君主がいやな顔をしても諫める）す。而るに神祖土を愛し奔言に忍びず。凶書感激し耳（目）にして之が為に死す。君臣の際ふたつながら得と謂ふべし。相伝ふ、台廟深く此事を悪むと。元和中正則の封を奪ひて流に処す。残忍貪虐の罪惡貫盈（惡事が広く行われる）するに由ると雖へども其原此に起くと云ふ。

是に先んじ、石田三成、膽吹山より逃げ草野谷に出で大谷山を歴鳥上山に至る。

從者三人。三成之に謂ひて曰はく、「吾間を伺ひ大阪に抵り薩摩に往き嶋津兵庫守と謀り大軍を再挙せんと欲す。汝等須らく此より辞去し以て時の至るを待つべし」と。三人の者棄て去るに忍びず。三ナリ（三成）之に強ひて曰はく、「汝曹吾を累はす。去らざれば則ち將に自殺せんとす」と。三人已むを得ず涕泣して去る。三成崎嶇間関（険しい山道を苦勞して進む）遺穂を拾ひ餐に充て経ること四日。泄を患ひ計出づる所無し。吉橋村に旧く識る所の村民與次郎大夫有り。就き己を舍くを求む。與次郎大夫、妻と謀り之を己の舎に匿す。悉力供給す。人或は之を知り與次郎大夫に謂ひて曰はく、「子、治部少輔を匿すと聞く。而るに今田中兵部大輔、井口に在り。搜索余力を遣さず。事發覺せば必ず罪を得ん」と。與次郎大夫固く争ひ之を無しとす。三成側に其言を聴き與次郎大夫に謂ひて曰はく、「吾運尽き命窮す。地身を容るる無し。汝宜しく自首すべし」と。與次郎大夫流涕して曰はく、「豈に敢へて此に至らんや（こんな筈ではないのに）。出で走るべし」と。三成曰はく、「吾病劇し跬歩（

足踏み出す）する能はず。道を進み事露はれ執へらるれば恐らくは汝に併累す。宜しく亟やかに之を告ぐべし」と。與次郎大夫已むを得ず井口に至り之を告ぐ。田中吉政大いに喜び其臣野村傳左衛門・沢田莊左衛門を遣はし之を捕へ井口の営に至す。合戦誌・餘史並曰、三成逃至江北草野谷、著襤褸戴破笠腰鎌為樵夫。昼伏宵行。將奔大阪。道路梗塞竟不能達。

患泄田（臥）草間。有人告之田中吉政。吉政遣田中傳左衛門捕之。三成給（給）曰、吾樵夫也。傳左衛門織（織）其面即繫（とらえる）之至吉政之營。家忠日記・松榮紀事作沢田莊左衛門一人。今從大全。大全亦拳一説、作野村傳左衛門一人曰、拋叱（此）説則三成從與次郎大夫之言出走破（被）捕也。附以備考 吉政之を出迎ふ。初め三

成大阪に在り威權甚だ重し。吉政之に敬事す。故に温言慰勞す。三成称呼平日に異ならず、傲然として之に謂ひて曰はく「吾、太閤の深恩を蒙り之を嗣君に報いんと欲す。故に秀家・景勝・輝元と計を定め此大事を挙ぐ。而れども一戦し利を失ひ竟に累囚（囚人）と為る。命之れ既に窮し復び憾む所無し。願はくは亟やかに自尽を賜へ。子の恵みなり」と。固く（かたくなに）懷中を探り短刀を出して曰はく「切

刃貞宗の名刀、太閤賜ふ所なり。諸書作切刃兼直、未知孰是。今從大全敢へて斯身これを離すべからず。今之を子に授けんと。吉政くすし鑿くすしをして疾を治さしむ。十八日より是日に至り善く之を供給す。大全・合戦誌・餘史長束正家、南宮山より伊勢に奔り山岡道阿弥の敗る所と為る。水口に還り城守の計を為す。從兵逃亡し与ともに守るべき無し。神祖、池田長吉・亀井茲矩をして水口に往かしめ之を図る。二人使を城守に遣はして曰はく、「足下必ず城守せんと欲せば則ち内府將に命じ城を抜き嚙類（民）無からしめん。宜しく城を避け罪を謝すべし」と。正家之に従ひ城を出で桜井谷の民家に移る。長吉・茲矩之に迫り自殺せしむ。弟伊賀守先に庭上に自殺す。水口城の金銀刀樂府庫ほこに充物じんす（みちる）。大全曰、黄金五千枚・白銀三千兩・金装刀一千口・其余器阮不可勝計正家之を藉せきし（記帳する）然る後に自殺す。長吉・茲矩、其簿たてまつを上る。神祖悉く之を二人に賜ふ。徳川記・大全・合戦誌・餘史。正家自殺諸書無日。今因三成事連書。按ずるに、上文七月正家の子兵

部少輔、父と石部駅に来謁す。其後諸書書かず。蓋し此の時同じく父自殺するなり。今考する所無し。安国寺恵

瓊、鞍馬山月照院に匿る。吉川廣家の栗屋十郎兵衛を遣はし之を索むるを聞き、

鞍馬山を出で六条本願寺子院に匿る。江州人樂鎮、惠瓊に憾み有り。大全・合戦誌・餘

史並曰、樂鎮、六角義郷之士某甲。被剃為僧三成・惠瓊讒義郷于太閤奪封流寓。故樂鎮深憾之。按ずるに、六角義郷

元其人無くして妄りに作為する所。説下文に見ゆ。故但云有憾之を輿平信昌に告ぐ。信昌兵を遣はし

之を捕ふ。惠瓊の士平井藤九郎・長阪長七郎之を聞き惠瓊を肩輿に乗せ二人之を昇か

き將に東寺に送らんとす。信昌の兵之を急追す。二人免れざるを知り以為おもへらく、

其他人をして之を殺さしむるよりは吾曹ごそう手づから之を刃するに如かずと。乃ち拔

刀し輿を隔て惠瓊を刺す。殊たたず。二人輿を棄て奮撃す。追ふ兵頗る死者有り。

鳥居強右衛門、惠瓊を輿中より曳き出で之を禽とらふ。合戦誌曰、強右衛門十六歳。抛此推之蓋長

篠義士強右衛門三孫也。信昌、大津本營に献ず。神祖黄金十枚を樂鎮に賜ふ。信昌をして

惠瓊を幽せしめ鑿に命じ劊を治さしむ。家忠日記・徳川記・慶元記・松栄紀事 合戦誌曰、使酒井

家次幽之。今従大全。又按ずるに、合戦誌、黄金十枚五十両と作して曰はく、樂鎮賞を辞し信昌強ひて之を与ふ。乃

ち之を受け銅錢數百緡（びん）を買ひ郷里に分ち与ふ。時の人之を称すと 村越直吉をして鮮衣を三成・行長・惠瓊三囚に賜はしむ。松栄紀事 加賀中納言利勝、再び起兵し金沢を発し寺井に至る。使を丹羽長重に遣はし同じく兵を進むるを勸む。長重報して曰はく「未だ内府の命を聞かずして遽にわかに兵革を興すは殆んど無礼に非ざらんや。吾敢へてせざるなり。命を聞き然る後軍を進めん。今、卿、吾城下を過ぐ。与に相見まみえん」と。利勝之を然りとす。

十三日、両将小松橋上に会ふ。利勝大聖寺に至る。其臣藤懸豊前を北莊に遣はし青木一矩に謂ひて曰はく「曩さきに卿けい、約せり、我越前に入らば則ち先導を為さんと。而るに敵将大谷刑部の指揮を受け、我を拒ぐの計有り。何ぞ前言と相反するか」と。一矩謝して曰はく「卿、兵を本州に進めば則ち吾必ず前驅を為す。故に内府に上書し具さに其事を列す。而るに病劇し従軍する能はず。甚だ初志そむに乖く。願はくは任子を送り以て無貳を明らかにせん」と。是に先んじ東郷城主長谷川長吉

の宰津田刑部、援を一矩に為す。衆を率ゐ来^(北)壯莊に在り。一矩の宰萩野河内と大聖寺に来、陳謝するも利勝聴かず。軍を進め越前に至る。鳴香川を涉り將に北莊城を攻めんとす。既にして関原戦敗れ敵將潰走す。一矩之を聞き大いに沮^{くじ}け又使を利勝の陣に遣はす。其子右衛門佐をして従軍せしむるを懇ろに乞ふ。利勝之を許し兵を引き去る。一矩厚く之に賂^{まい}ふ。利勝之を却け一として受くる所無し。進み江州に至る。利勝薨金澤以下合戦誌・餘史亦有其事。而大全叙事最詳。今從之 上方雄久・青木右衛門佐を率ゐ大津に至り上謁す。神祖、利勝・雄久に見え之を慰勞す。^{まみ}利勝に問ひて曰はく「如何に利政を処分するか」と。利勝対へて曰はく「利政力を出だし大聖寺城を政^(攻)め頗る功効著し。意中に異図を畜^(蓄)へざるも之を招くに出でず。之を先づ討たんと欲すれども事機に後るるを恐れ姑^{つひ}く之を置く。願はくは大聖寺の戦功を以て其死を貸すを得ん」と。神祖之を許す。利勝又羽柴加賀守の罪を赦すを請ふ。神祖曰はく「長重の罪死に当る。何則^{なんと}太閤、長重の封を没し纔かに采邑を

給ふ。吾其父長秀と旧有るを以て、力を悉し保祐す。ソノ後小松城主と為し加賀守に任じ参議を拜す。皆吾の汲引する所なり。而るに其恩を忘れ兇徒に党し卿と争衝す。果たして何の謂ぞや」と。利勝曰はく「長重、利政の兵を浅井躰に邀撃すと雖へども幾ばくもなく降を乞ふ。事、関原交戦の前に在り。是れ旧恩を忘れずして其の過ちを悔ゆるなり」と。神祖曰はく「曩に卿出師し使を小松に遣はし其の帰款を勸む。而れども従ふを肯んぜず。反し卿に敵し其の士卒を戕す。吾惡む所の者は其迹に非ずして其情に在り」と。利勝・雄久皆語無し。世子、側に在りて曰はく「長重旧恩を忘れて反徒に与す。誠に惡むべきなり。然れども秀家・輝元以下諸将皆秀頼を翊戴するに仮り、名を為す。則ち長重、太閤の恩を重んじて拳兵し我に抗す。其の情も亦恕すべきなり。近年彼と交を結び其の器度を觀るに、実に将師の量有り。其れ金沢の大軍と雌雄を一挙に争ふ、是れ真に其の蘊む所に不ざるなり。縦ひ其の封を奪ひ以て之を罰するを示すとも、他年新たに采邑

を給ひ麾下に隸せしめば則ち彼必ず恩に感じ力を効さん」と。神祖之に従ふ。利勝又従容として言ひて曰はく、「青木紀伊守敵に与するの名有りと雖へども、事証(証拋)有るに非ず。反徒関原に敗るるを聞き累ねて帰を乞ふ。其子右衛門佐をして従軍せしむべし。而来是れ之を質と為さしむるなり。願はくは其の罪を赦せ」と。神祖曰はく、「一矩實に異図無くんば則ち大谷吉隆何を以て北莊に淹留して北国を經略するを得んや。一矩、卿に納放(款)し書を我に寄す。是れ皆形勢を觀望し勝敗を計較す。智算有るに似るも志甚だ汚下(低)なり。之を羽柴長重、卿と決戦するに北(比)すれば則ち同日にて語るべからず。宜しく其の封を奪ふべし。其余長谷川長吉・青山修理亮・丹羽備中守等 備中守長重弟名長正 越前将士、其党与を為す者、須らく亟やかに城堡を出で他邦に避け之(ゆ)くべし。然らずんば將に征伐を命じ一つとして宥す所無し」と。利勝又謂ひて曰はく、「右衛門佐年少く順逆を知らず。唯だ父命のみ是れ従ふ。願はくは斗筭(少ない)の祿を給ひ以て其の家を継がしめよ」と。神祖

終に聴かず。利勝・雄久退きて右衛門佐を諭言す（さとす）。使を北莊に遣はし青木一矩に告ぐ。党与悉く亡げ去る。又使を小松に遣はし丹羽長重に告ぐ。長重城を出で去り再び丹羽五郎左衛門を称す。神祖、保科正光をして北莊城を成らしむ。

是に先んじ、正光濱松城を成り是に至り越前に赴く。大全 徳川記曰、紀伊守死後利勝請宥右

衛門佐。神祖不聽。竟流洛。按ずるに、是時一矩罹疾す。然れば其の死実は此の後に在り。今大全に従ふ 神祖、

大野治長を召して曰はく、「聞くに、今茲（こんじ今年）の兵は臣石田三成・贗僧安国寺等

の姦謀を佞信するより草出す（始まる）と。而れども秀頼幼弱にして所生大虞院皆知

らざる所なり。吾、母子に芥蒂（かいたい小さなつかえ）ある所無し。汝宜しく大阪に往き此の

意を以て諭すべし」と。治長、大阪に馳せ赴き神祖の命を伝ふ。秀頼母子大いに

喜び柘植大炊助を以て治長に副へ大津営に至り之を謝す。松栄紀事係二十五日曰、秀頼以治

長・大炊助為使至大津営曰、秀頼弱小不知叛乱所由。皆三成之所為也。神祖優容之。按ずるに、此の時治長関原に従

軍し大阪に在らず。秀頼母子を優容するは皆神祖の意に出づ。今大全に従ふ

二十二日、井伊直政・本多忠勝・松平忠明・福島正則・池田輝政・浅野幸長・黒田長政・藤堂高虎・有馬豊氏をして葛葉に陣せしめ大阪城に迫る。大全戴(載)一説曰、

或曰、直政・忠勝有事留于大津。家忠日記・合戦記亦無直政・忠勝。全從大全文・松栄紀事 増田長盛、秀頼

を奉じ牙城に在り。毛利輝元西城に在り。長盛と協せず。諸將使を城中に遣はし輝元の去就を問ふ。輝元吾を支ふる能はず、直政・忠勝に就き和を乞ふ。神祖之を許す。餘史・松栄紀事並云、諸將遣使謂輝元曰、城守而戦乎。避城而出乎。諸問其意。按ずるに、輝元密かに

秀元・廣家をして款を輸(か)へしむ。必ずしも此に至らず。故に但だ云ふ、其の去就を問ふと

二十三日、田中吉政、石田三成を將る本營に至る。神祖其の功を褒め本多正純をして之を幽せしむ。吉政、三成遣はす所の短刀を上る。神祖、吉政をして之を受けしむ。家忠日記曰、命本多正信幽之。今從大全・関原軍記・合戦誌・餘史・慶元記・松栄紀事 合戦誌曰、相

伝、神祖賜三成於鳥居久五郎成次曰、此汝父之仇也。汝可甘心。成次拜謝幽之。一日明日献之。夫三成天下之讐敵也。

何謂元忠一人之仇。而賜之成次乎。鳥居家伝又所無其説不足信。今按ずるに、徳川記・大全・餘史も亦其の説を載す。

合戦誌論（たと）ふる所是なり。故に取らず 関原の敗、島津惟新、其纒か五十余騎を残し土岐多羅尼山路に由り八日市を歴、高宮河原に出づ。牛を椎ち（うちうち殺す）以て軍士の飢えを救ふ。合戦誌・餘史並曰、剥牛皮掲竹竿以為幟 甲賀谷に至り農夫を捕へ郷導を為さしめ水口・信楽を過ぐ。土人争起し之を邀ふ。従兵之を撃破し一人を虜へ五人を斬る。上野城下に梟首し虜を柵木に縛る。笠置・加茂を経南都に抵る。河内路に由り住吉に至る。界津商人田邊屋作庵置酒し之を犒ふ。惟新大阪に至り敗兵来集す。使を毛利輝元に遣はし守城に入るを請ふ。輝元依違（ぐずぐずあいまいな態度）として答ふる能はず。惟新以為へらく、此れ憑むに足らず、国に還り拳兵するに如かずと。乃ち其妻及び龍伯の女を取り船を櫂（準備）し薩摩に径還す。其子忠恒遁れ京師に至る。道正庵に寓し薩摩に尋ね還る。立花宗茂大津城を冠め之を陥し土馬を体む。將に関原に向かはんとし石田三成の敗績を聞く。孤軍戦ふ能はず、兵を引き京師に趨り馬を三條御幸町に立つ。使を三木本第に遣は

し木下家定に謂ひて曰はく、「足下須らく高臺院を護り大阪城に入るべし。吾も亦城に入る。共に戦守の計を作さん」と。家定もと素関東に帰款す。答へて曰はく、「足下そっか、須らく先に大阪城に往くべし。吾將に継発せんとす」と。合戦誌曰、家定護高臺院遁於禁廷。

大全無其事。附以備考 高臺院の宰小堀新助政次銃矢に備へ守禦の勢を作す。宗茂大阪に

往き至る。使を毛利輝元・増田長盛に遣はし方面の任に当るを請ふ。輝元・長盛

答ふる能はず。宗茂其無能を知り、ため為に曰はく、「亟やかに本州に還り以て時変を

観るに如かず」と。其臣諫めて曰はく、「主公、太閤の恩に報い輝元の知にむく酬ゆる、

是の如くにて足れり。願はくは罪を内府公に謝し以て宗社を保全するを図れ」と。

宗茂之を然りとす。乃ち薦野半左衛門親次を以て使と為し 親次立花賢賀弟。名抛安東守経

所書 帰正を乞ふ。港口に在る所の船を奪ひ柳川城に還る。 大全・合戦誌・餘史・慶元記。還

使乞帰正。抛大全 毛利秀包、関原戦敗を聞き大津より大阪に還軍す。宗茂路に秀包に

逢ひ之に謂ひて曰はく、「吾と足下と皆太閤の恩を蒙る。故に一旦大阪の催督に従

ふと雖へども終に内府に敵するの理ことわり無し。吾已に款を送る。足下も亦宜しく使を遣はし款を輸いたすべし」と。之を勧むること再三。秀包聴かずして曰はく「吾、足下と事勢同じからず。宜しく輝元と商議はかり以て去就を決すべし」と。遂に大阪に留（並）在す。鍋島勝茂・筑紫廣門並び大坂を出で本州に還る。大全

二十四日、世子伏見に至る。大全 毛利輝元大坂西城を出で木津別荘に退く。池田輝政・福島正則・浅野幸長・黒田長政・有馬豊氏・藤堂高虎西城を麗掃し以て神祖の至るを待つ。大全作正則一人。今従家忠日記・松栄紀事 神祖報政（執）に謂ひて曰はく「安藝中納言敵の魁師（帥）たると離（雖）へども宰相秀元・侍従廣家、誠款（真心）を懇布す。故に釈ゆるして問はず。増田右衛門尉首鼠（しゅそりょうたん）両端（日和見）し竟に補ふ所無し。宜しく死罪一等を減じ封を奪ひ流に処すべし」と。

是日、長盛大阪城を出で高野山に赴き城門より木津に至る。東兵左右に陣列し長盛其中間を過ぐ。従兵数千皆散り去る。長盛及び其子兵大夫宗重を武州巖築に尋

幽し高力忠房をして之を監しむ。家忠日記・徳川記・慶元記・餘史・松榮紀事。宗重或作守次、今從先

臣城所友仙訂正 是に先んじ、神祖、筒井定次及び大和將士に命じ郡山城を取る。定次、

笠置・奈良の間に陣し其余の將士玉水に陣す。長盛処守の臣槁與兵衛・鹽屋法順

相議り渡邊了をして第三城に入れ軍事を処分せしむ。中村一氏卒、了仕長盛 了の法令整

肅たりて毎日寇賊を捕へ斬る。敢へて未犯する者無し。(来) 城兵凡そ九千ばかりの中

に亡去するモノ有り。(者) 兵三十余人奴僕七八百人。了の部下一人として離叛する者

無し。人其嚴しきに服す。了父母及び妻を時(將) め牙城に至り與兵衛に謂ひて曰はく

「城兵怯懦たりて其志一ならず。逃ぐる者は其の意に任せよ。吾当に部兵二百を

以て牙城を堅守すべし。故に之を質として納む」と。城兵之を聞き質を納むる者

十一人。隊將田中角之助、城守るべからざるを度り潜はかかに妻孥を城外に出す。城

兵之を讎そしり終に此を以て廢す。大全〇合戦誌・餘史並曰、田中角之助為城代在牙城。渡邊了守第二城。

角之助以為城守而戰則妻孥必為累。乃出之城外。了遣使牙城曰、今当与子共守此城決死一戰。請、送我家累於牙城。

与子妻孥同死。角之助悔之不及。乃告其実。了怒曰、城陷之日至於妻子奴隸、從我而死、為士者之常也。今無故出之。

此為走計耳。我不能「」其為也。時人譏角之助為懦大。故以此廢。頗与大全異。附以備攷 藤堂高虎・本多

正純・舟越景直及び池田輝政の宰伊木忠重、兵を將ゐ郡山城に向かふ。兵拒守の

計を為し、了の指麾を受く。長盛高野山に在り、之を聞き城中の金銀資財を藉す（帳

簿を付ける）。手書し書守の臣を諭し城を高虎・正純に授く。了、城兵をして旗幟を

巻かしめ正門より出で城を致して去る。合戦誌・餘史作藤堂高虎・池田長幸二人曰、高虎・長幸將

共至郡山諭田中角之助・渡邊了致城。二人（田中・渡邊）対曰、唯命是從。然無主將之命。請、取主將書牒。未高虎・

長幸遣使高野山。告之長盛手書諭之二人致城而去。今從大全○渡邊了始事中村一氏著名於山中城。事在天正十八年。

大全・合戦誌・餘史並曰、藤堂高虎美了之拳動召為己臣。神祖聞其名欲召隸麾下。堀尾吉晴亦厚礼招之。然以与高虎

有約、出城至南都。往豫州仕高虎。了在郡山食邑一万石。高虎倍之給二万石。給長子長兵衛三千石

臣按ずるに、田中角之助妻孥を城外に出だす。関ヶ原合戦誌・石「卯カ」餘史の

説に抛れば則ち是計を為すに非ずして其累を為すを恐るるなり。渡邊了則ち之

に反し妻孥をして城中に同死せしめんと欲す。故に角之助怯懦の名を蒙りて士流に齒し（同類に並ぶ）せず、終に以て自ら其志を明らかにする無し。士の挙動慎まざるべけんや。晋の成帝の時、蘇峻の乱に、朝士京邑に危迫るを以て、多く家人をして東に入れ避難せしむ。左衛將軍劉「超」独り妻孥を遷し入り宮内に居る。前史之を美ほむ。了武人たりて固より超の事を知る能はず。而して其所為暗に之と合ふ。亦識略有る者と謂ふべきなり。

神祖、松平忠良・松平忠政をして大津城を留守せしむ。家忠日記・大全・合戦誌 島津惟新の臣伊集院在京（左）・有川助兵衛、計を以て竊かに大坂の第に在る所の惟新夫人を取（待）る。舟三艘を周防海上に泊め以て順風を持（待）つ。夜半風潮を得（いかり）碇を起し一艘先づ発す。夫人及び左京・助兵衛乗る所の二艘、後に発す。黒田如水戌船を富来浦に置き以て往来を監る。戌船屯大（火）を然りとす。薩摩の船誤り前船の炬と為す。富来浦に近づくこと一里ばかり。

二十六日、天將に曉あけんとす。薩摩の船之を覺りて驚き船を走らせ浦を出づ。成船之を怪み纜つなを解き之を追ふ。左京・助兵衛降を乞ふ。成船聴かず。争ひ鳥銃を發す。二人其免かるべからざるを知り相謂ひて曰はく「捷かたずんば則ち当に夫人をして自裁せしむべし。吾輩決志闘死せん」と。乃ち兵二、三十人を舷に列す。二艘左右に分け為し鳥銃を連發す。成船八艘各左右を攻む。薩摩の兵悉力拒闘す。勝敗未だ決せず。成船火を篷とまに放ち之を投ぐ。二艘の船一時に悉く焼く。船中の婦女悲泣大叫す。惟新夫人端座し動かず。左京・助兵衛及び其余敵兵或は焼死し或は戦死す。日辰しんを加へ豊後姫島に戦ひ晡時ほ(夕方)同州佐賀関に至り方に止む。池(海)上幾千里敵船乗る所の者二百人ばかり、舟師十三人、女子八人獲られ、其余悉く死す。成兵の死者四十余人。其の夜富来浦に泊る。船監松本吉右衛門捷かちを如水に告ぐ。如水喜ばずして曰はく「成兵命を稟うくる所無くして浪戦す。且婦女を殺すは仁ならざるなり」と。唯だ刀戦(カ)する者を賞め錢糧衣服を生口(せいこう)(捕虜)に給ひ人を

して薩摩に護送せしむ。慶元記・餘史並云、薩摩船投万人敵以防如水之兵、誤自燒其船。今從大全・合戰誌

是日、神祖大津を発し伏見に至る。藤社を過ぐる比酒井重忠及び弟忠利、道左に謁す。神祖之に謂ひて曰はく「吾、松平甲斐守・松平出羽守をして大澤城(津カ)を権かりに守らしむ。大津は枢要の地、二人年尚ほ少わかし。汝兄弟須らく往き助け守るべし」と。重忠・忠利命を奉めいけて去る。家忠日記・大全・合戰誌・松榮紀事 世子伏見に在り。神祖に謁す。神祖諭すに明日を以て將に大阪に入らんとすと。

是夕、神祖淀に次やどる。

二十七日、大阪西城に入り、世子第二城に入る。創業記者異・松榮紀事並云、二十八日神祖入西

城。今從創業記正文・家忠日記・大全

二十八日、勅使來賀す。家忠日記・松榮紀事 福原直孝固く大垣牙城を守り下らず。西尾光教箭書を城中に射て曰はく「相良・秋月・高橋等歸順し以て旧封を全うするを

謀る。而るに子、城に拠り自守し、已に数日を経。内府必ず子を赦さず。聞くが如く、加賀井弥八郎の子匿れ城中に在り。今子之を出だし以て水野兄弟に付かば則ち、縦ひ旧封を得る能はずとも亦湯沐邑を失はず」と。直孝之を然りとし、質及び誓書を請ふ。光教、其宰谷清兵衛を以て質と為し誓書を齊へ城に入る。直孝、加賀井重望の子を水野勝成に付け城を出づ。披剃し道蘊と号す。光教使を遣はし之をして朝熊に避け至り以て罪を謝せしむ。直孝朝熊に至り清兵衛を還す。書及び短刀を光教に遣はし、以て其の慇懃を謝す。光教、諸將と議り城陥るを井伊直政に告げ、就き直孝を赦すを乞ふ。神(祖)神聴かず。亟やかに之を殺さしむ。

是日、光教又使を遣はし諭旨す。直孝命を聞き自殺す。神祖、松平康重をして大垣城を成らしむ。勝成・光教等諸將皆兵を引き去る。大全諸書或云、直孝入高野山。今從徳川

記・大全・慶長一統記。抛大全、直孝二十三日出城。今終言之。故不係日

二十九日、公卿百官・祠官僧侶及び畿内の富商悉く来拜謁す。阿部正次・西尾吉

次・山口直友・城織部・永井直勝、介を為す。創業記・家忠日記・合戦誌・餘史・松栄紀事 神

祖、井伊直政・榊原康政・本多忠勝に命じ諸將に忠否を糾す。ただ 天下の政事を議り

本多正純をして訟を聴かしむ。直政・康政・忠勝上言するに、大坂は形勝の地た

り。反徒往々に秀頼を挟さしはさみ乱を作す。彼をして此に在らしめば則ち反者の心を啓ひら

くと。神祖曰はく、「秀頼幼稚たりて姦臣の謀を知らず。何ぞ之を疎斥するを忍ば

ん」と。故に秀頼牙城に在ること旧の如し。其後、神祖秀頼を謁す。接遇款曲（う

ちとける）たりて片桐且元をして之を輔せしむ。人心始めて安んず。松栄紀事 大阪記叙十

六年三月。秀頼来謁二条城曰、神祖謂片桐且元曰、石田・増田之謀逆非二人之所為。皆出秀頼之意。当時吾欲殺之思、

太閤之眷遇故赦之。宜以此意諭大虞院。其説謬妄。恐惑世人故標于此 初め敵將大津城を囲む。神祖、

京極高知をして之を救はしむ。其の兄高次城を避り高野山に登る。故に及ぶ能は

ず。高次関原の大捷を聞き甚だ之を悔やむ。神祖大阪城に入るに及び諸將皆来謁

す。独り高次のみ来たらず。神祖、井伊直政をして之を召さしむ。高次対こたふるに

以て、何の面目有りて出で見ゆべけんやと。神祖、山岡道阿弥を以て使と為し之を召す。高次固辞して出でず。又道阿弥及び直政を以て諭旨して曰はく「四、五万の敵兵以て大津城を攻め関原に至るを得ず。此れ高次の功なり。何ぞ来見せざる」と。言甚だ周摯しゅうしたり。高次命を奉け来謁す。神祖善く之を遇す。合戦誌・餘史並云、

神祖謂高次曰、能忍一一日城守則当授江州一國。惜哉。松榮紀事云、唯恨、一日守城不足。不知吾大掟（捷）故此至耳。按ずるに、唐の韓愈詩（許）遠・張巡の功を論じて曰はく、「一城を守り天下に捍す。千百尽に就くの卒を以る百万日滋の師を戦ふ。江淮を蔽遮し其の勢を阻遏す。天之（下）の亡びざる、其れ誰の功ならん」と。高次の拒守の功、二子に及ぶ能はずと雖へども神祖之を褒め、殺さず。其の功以て人の美と成す。其意蓋し此の如し。必ずしも此言を發し以て之を折辱せざるなり。故に今大全に従ひ之を取らず。三説を書く

臣按ずるに、関原合戦誌・石卯餘史並び曰はく「六角修理大夫義秀の子右兵衛義郷は江州の世家なり。往年関白秀次に党し太閤怒り其封を奪ふ。京師に流寓す。石田三成・増田長盛相議り義郷を以て北国大将と為さんと欲し秀頼の命を矯ま

げ使を遣はし之を召す。義郷病と称し出でず。三成其の命に忤^{もと}るを怒り之を殺さんと欲す。長盛救護し免るるを得。神祖大阪に在るに及び九月二十八日徳永法印寿昌を以て使と為し義郷を諭し旧封を復せんとす。義郷固辞し出でず。石卯餘史其語を詳載す。神祖之を聞きて曰はく「当世の君子なり」と。関原記大
全も亦其の説を載せ以て真偽相半すと為す。未だ敢へて決然とソノ事無しと謂はざるなり。近世の六角兵部氏郷、江源氏武鑑を著し世人を欺罔^{ぎもう}す。蓋し諸書武鑑に拠り之を書くなり。加賀守菅原綱紀騎隊長佐々木左兵衛定賢、佐佐木家譜を撰し江州佐々木社に蔵す。偽の宗弁を著して曰はく「寛永・正保の間に澤田氏の子氏郷を名のる者有り。其先は六角家臣僕なり」と。高頼六世の孫を偽称し自ら六角兵部と号す。蓋し高頼の長子氏綱父に先んじ卒し、子無し。將軍足利義植、次子定頼に命じ嗣と為す。是に由り氏郷、氏綱の後たりと矯る。偽り三世の名字を作し以て氏綱、其子義実^{義実}に伝へ、義実其子義秀に伝へ、義秀其子

義郷に伝ふと為す。義郷即ち氏郷の父なり。又其偽を文りて其の説を售らんと欲すれば則ち旧藉の言を剽窃し牽合附会す。天文より元和に至り以て三世の実録と為し、名づけて江源武鑑と曰ふ。弁駁昭晰、復び餘蘊無し（反論は明白で余すところはない）。夫れ義実・義秀・義郷三世、実は其の人無し。而るに有ると為す。又神祖、義郷に賜ふ書と偽り作し、之を江源武鑑に載す。故に世人往々に之を信ず。姦人世を惑はし民を誣し一に此に至る。其の罪誅を客（ゆる）さず。臣、後人又惑ふ所と為るを恐る。故に此に論ず。

神祖、井伊直政・本多正信・山口直友に謂ひて曰はく、「太閤、島津惟新の朝鮮の軍功を賞めんと欲するに亡何薨逝す。吾諸大老と議り封を増し辞を進む。而れども惟新其の故を思はず、父子兇徒に党し其臣之を諫むるも聴かず。力を出だし伏見城を攻め衆に挺んで関原に戦ふ。罪不赦に在り。其の罪を声して之を討つべし。然れども竜伯、惟新に私し以て滅亡を取るべき者に非ず。方に大阪に來以て惟新

父子の罪を謝せんとす。而して今に至るも音耗おんこう（知らせ）無し。汝等宜しく其の故を問ふべし」と。三人書を竜伯に遣はし惟新の薩摩に還るを詰問す。竜伯其逆に党するを怒り其の封内桜島（銅）に銅し謁見を許さざるなり。惟新謝して曰はく「本内府もとの東征に従はんと欲す。而れども兵寡きを以て之を本国に徴す。故に其故を内府に告げ兵至るを待ち後より発せんと欲す。而れども秀家・輝元之を要するが為に已むを得ず之に従ふ」と。竜伯之を聞き其意解く。大全・合戦誌二書並云、竜伯遣其臣鎌田出

雲於大坂分疏之。按ずるに、出雲大坂に来る、下文明年四月に在り、二書其事を究言するなり。故に取らず。餘史

曰、竜伯詰問惟新不許謁見。惟新謝曰、本欲入我（伏）見城同守。然守將鳥居彦右衛門峻拒不納。故不得已党于三成。

先是山口直友捕惟新之兵大田助之亟・新納旅庵、鞠（きく）問之。二人詳説元忠不納惟新之状。至是直友与井伊直政・

本多忠勝議遣助之亟於薩摩副以直友之臣和久某。謂竜伯曰、亟入京師以謝其罪則公怒必解。竜伯悦従之。附以備攷

十月朔、神祖、奥平信昌に命じ石田三成・安国寺惠瓊・小西行長を市に徇まわし（見せしめに回す）之を六条河原に於いて斬る。其の主名を榜かげ之を三条河原に梟す。観る者

重沓す。年譜・創業記・家忠日記・大全・合戦誌・餘史・慶元記・松栄紀事 伏見城の反徒永原十内・

山口宗助以下十八人を粟田口に於いて磔す。家忠日記・合戦誌・餘史・松栄紀事並無月日入從大全

臣按ずるに、石田三成使べんねいこうかつ（便）佞狡黠。財利に長じ善く逢迎を為す。故に秀吉

公（微）徵賤より擢き五奉行の一に居く。佐和山城を以て授け軍国事を裁決せしむ。

寵栄極まれり。而れども其の志あ驕かず一旦（ある日）事を挙げ関西を動揺す。敵將

豊臣秀秋・毛利秀元・氏家行廣の如きは皆其の秀頼を擁戴するに託言し以て其

私を済なすを知る。況や加藤清正・細川忠興・黒田長政・京極高次の如きも（亦）マタ能

く其の情実を審かにし成敗を予料す。臣（著者）皆實に拠りて書く。班々はんぱん（それぞれ）

考ずべく、復（此に）び（論）コノに諭列せず。小西行長、朝鮮の役に頗る威名を著し徒らに

血氣の勇を逞しうすれども善後の策を思はず。終に清正と相軋きしり大いに諸將の

悪む所と為る。孤立無援、三成と相明（朋）比（組む）せざるを得ず。錢鳳・沈允の王

敦に於ける、傳亮・徐羨の謝晦に於ける、其勢然（也）るナリ。其党青野原に戦ふに

及び行長一戦し輒ち敗る。手を束ね禽に就く。世の大憖たいろく（大辱）たり。何ぞ前に勇みて後に怯なるや。安国寺惠瓊才能を以て秀吉公に寵有り。建牙し騶騎士に列し勢諸「侯」と等し。遂に其分を忘れ三成・行長に党す。幢幡（仏堂の旗）旌旗（戦の旗）となり厠養（雑用召使）隊位（伍）と為り、終に一矢を交する能はず望鳳（風）逃竄（ざん）す。近世の僧永覚云ふ有り。僧家跡を寰中（天下）に寄せ身を物表に接す。一切の塵気尚ほ謝絶すべし。況んや禄位を貪るべけんや。一切の文事尚ほ与（とも）にすべからず。況んや武事を操るべけんやと。因りて元の劉秉忠・明の姚廣孝を論じ、仏門中、万世の罪人たりと。況や惠瓊の如き者、其大罪を為すはみ当（又）に何如（いかん）五日、毛利輝元、木津別荘を出で安藝に還る。神祖世子をして之を撃たしむ。下令し將に十六日を以て出師せんとす。輝元、井伊直政に就き罪を謝して曰はく「内府公、意、我家を存恤（ぞんじゆつ）する（救済する）に有らば則ち周防・長門二州を給はば足れり。其余八州は請ふ、之を納めん」と。直政固く請（う）く。神祖之を許し書を輝元・秀就

あがな

父子に賜ひ其罪を贖はしむ。直政誓書を以て副へ之を諭す。安藝・備中・備後・因幡・伯耆・出雲・隱岐・石見八州を削り周防・長門を授く。輝元悦び服す。故に世子兵を出さず。年譜・合戦誌・餘史・慶元記・松栄紀事 輝元披剃し宗瑞と号す。秀元を以て嗣と為す。大全・寛永系図・慶元記、按ずるに、輝元子無く従兄秀元を養ひ子と為す。其の後子秀就生まれ、故に他年秀元、秀就を以て嗣と為す

吉川秀家致仕落髪し如見と号す。大全 赤松則房佐和山

ざんとく

城を出で林藪に竄匿するも何する無く逮捕せらる。奥平信昌之を斬る。大田美作守勢田を成る。関原の兵敗走し朝熊に至る。池田長吉・山岡道阿弥之を攻め殺す。

合戦誌・餘史 道阿弥桑名城に進攻す。城主氏家行廣の弟志摩守・寺西備中守等守る能

はず。合戦誌・慶長記、備中守作下野守。今従家忠日記・大全・餘史 行廣降を乞ひ城を致して去る。

道阿弥、神戸・龜山二城に進攻し羽柴勝雅・岡本下野守拒ぐ能はず。亦皆降る。

道阿弥数日せずして三城を挙げ兵を置き之を成る。

六日、大坂に至り之を告ぐ。合戦誌・関原軍記並云、至伏見告之。按ずるに、神祖此の時大阪西城に在り。

今之を訂す。大全・合戦誌並曰、行廣出城披剝称荻野道喜。其後入大阪城殉死秀頼。合戦誌曰、寺西下野守家素富、為僞人終身。羽柴勝雅蒙沛者子孫仕幕府復滝川氏猷廟。時勝雅以耆老備顧問岡本下野守往年党于秀吉攻旧主織田信孝。

故神祖深惡之。流寓而死 神祖、其干戈を勞さず亟やかに三城を抜くを褒む。道阿弥謝して曰はく、「此れ老夫の力に非ず。皆閣下の威風の被る所なり」と。家忠日記・合戦誌・

餘史・慶元記・関原軍記・松栄紀事 大谷吉久・木下頼継、垂井より遁れ敦賀に歸る。処守の臣蜂屋市兵衛と議り散卒を召集し城に拠り拳兵せんと欲す。城兵関原の敗を聞き皆離散し敢へて応ずる者無し。二人事済せざるを知り潜かに大阪に奔る。大全・合戦

誌・餘史○大全曰、木下山城守無幾病死。元和元年大阪城陥、大谷大学殉死秀頼 初め神祖上杉景勝を征せ

んが為に江戸城に入る。書を最上義光に賜ひ陸奥・出羽の諸将をして義光に従ひ

米澤口を攻めしむ。南部信濃守利直 大膳大夫信直子 兵五千人・和田実季二千六百五十

人・戸澤政盛二千二百人・本堂源七郎四百人・六郷兵庫頭政乗 弾正直行子 三百人・

赤尾孫三郎二百人 松栄紀事赤尾作赤尾津。今從大全・最上義光記 ・仁加保兵庫一百八十五人・

滝澤刑部一百十人・内越孫四郎六十四人・巖右兵衛合戦誌巖作山名。蓋岩字草書訛作山名二字。

松栄紀事作巖屋。今從大全・義光記 四十人、兵合一万一千百余人山形に木会す。(米) 義光と議

り軍佐(伍)を定む。松栄紀事以此兵数係明年八月。使義光統領隣境之兵下蓋抛此時兵数羽(明)年賜印章也。今從

大全 義光、長子修理大夫義康をして兵千五百を將ゐしむ。諸將を將ゐ(米カ)末澤口に向

ふ。諸將、石田三成拳兵し宇喜多秀家伏見城を困むを聞く。以為へらく、天下大

乱し寇賊將に管内に起たんとすと。義光に告げずして兵を引き各城堡に歸る。義

光の臣里見越後・鮭延越前・延澤能登之を追撃するを請ふ。義光許さずして曰は

く「今諸將と兵を交せば則ち景勝必ず其の源(隙)を同(伺)ふ。且諸將或は離反有らば則ち

内府の事に益無し。汝輩決死確闘せば則ち隣境の兵を仮らずして以て志を得べし。

去る者は進(追)はざるが可ナリ」と。義光の士丹與三右衛門年老い致仕し金山の險を

成る。弓銃を列し旌旗を山上に速(建)て甲士数十人其の下に在り。諸將金山に至るも

門闔ぢ過ぐるを得ず。使を遣はし開門せしむ。與三右衛門曰はく「諸將遽(にわか)に歸る

は景勝に党するに非ざるを得んや。主君の命を聞かずは則ち門開くべからず。使を山形に遣はし報を得処分せん。之を待つを請ふ」と。諸將山上の戍兵嚴備するを望見し意下に撃せんと欲すれども、之と交戦せば則ち佗日神祖たじつの怒に触るるを恐れ已むを得ず遅留す。既にして義光の報至り其過ぐるを許す。與三右衛門開門し諸將方に過ぐるを得。其鳥銃・禾棍(木)、火繩を安んじ銃眼に列す。山上の旌旗は皆単衣を綻りやぶ樹枝に繋ぐ。甲士は婦女百姓をして捍甲せしめ林藪に列す。時の人其の膽智に服す。上杉景勝、直江兼續を以て大将と為し水原親憲軍監と為す。別將上泉主水・溝口立馬・色邊修理・松本木工・春日左衛門・巖井備中等兵一万二千、兼續の部兵八千、総二万人、米澤を出で山形を攻む。 大全・合戦誌・義光記 志茂治

右衛門をして兵二千五百を將ゐ奇兵と為し谷地寒川江を寇む。 諸書志成(茂)作下。国音

相通。今從慶元記。按ずるに、諸書治右衛門の兵数を載せず。今四家合考に拠る。最上義光作貫參河守と書く 義光

援を伊達政宗に乞ふ。政宗、伊達吉岐・遠藤弥兵衛をして 合戦記作伊達上野・石川加兵衛。

今從大全・義光記 兵三百を將ゐ來援せしむ。義光記曰、騎兵一百五十、歩卒幾一千人。今從大全 義光

の將江口五兵衛旗屋城を成る。義光其の地形守り難く且寡兵たるを以て使を遣はし、五兵衛を、城を棄て山形に歸らしめんと諭す。五兵衛對へて曰はく「未だ敵の旌旗を見ずして退兵するは夫に非ざるなり。死を以て守るを請ふ」と。義光、

矢桐相模

矢桐諸書作矢柄。今拋大全・義光記訂之

・飯田橋磨(播)をして百余兵を率ゐしめ之を援

く。未だ至らざるに兼續、旗屋城を攻む。五兵衛兵を城外に伏せ河水を湛たへ堰と為す。兼續伏兵を殴ち之を却く。親憲河上を按視し其堤を壞す。水立ちどころに洄れ敵兵勢に乗り城を攻む。五兵衛其子小吉・姪(忠)志作と槍を揮い城を出で縦横に奮撃す。敵兵披靡し五兵衛城に入り門を闔とづ。兼續歩卒をして山に登らしめ城中を下視し火箭・大銃を放つ。城兵死傷するもの多し。五兵衛其の守るべからざるを度り又子姪と城を出で刀戦す。牙城に引き入り自殺す。小吉・忠作も亦同死す。城兵の戦死三百五十人。敵兵火を縦ち城を燔やく。城遂に陥つ。城中の男女及び近

村の民庶皆出で走る。会津の兵之を追ふも、山形の援軍大いに起つを見、中路に還らんとす。飯田播磨、矢桐相模に謂ひて曰はく「事急たり。子老弱を護りて帰れ。我留り此に戦ひ勇を奮ひて死せん」と。相模高きに登り之を望む。我軍の既に危きを見、遇^(逆)戦し之を破る。敵兵退走す。遂に老幼を挾^{たす}へ山形に帰る。大全・合

戦誌・義光記 直江兼續、志茂治右衛門の奇兵(不意うちの戦)の報を聞き長谷堂・上山二

城を攻めんと欲す。上上山に登り山形を下視す。軍を停むること三日。既にして

治右衛門の捷報至る。乃ち軍を進め長谷堂城を攻む。義光記 兼續須賀澤山に陣す。

長谷堂を距つること十余町。春日左衛門を以て前鋒と為し、左衛門山麓に陣す。

兼續以^{おも}為へらく、長谷堂山形を距つること二里。然れども最上川有り。義光輒ち

救ふを得ず。上山も亦隔つること二里。而して險阻無し。城主里見越後或は出で

之を援けんと。乃ち上泉主水をして三千余人を將ゐ上山に備へしむ。城兵穂村造

酒允・椎野弥七郎前鋒を為す。是に先んじ義光、鮭延越前・小国大膳・谷地盛伯

耆・川熊讚岐等をして長谷堂城を援けしむ。城兵総て四千五百余人。城将志村伊豆、越前と議り大風右衛門・横尾勘解由をして鋭兵二百余人を率ゐ左衛門の営を夜襲せしむ。敵兵大いに惶擾す。左衛門出で走る。右衛門・勘解由勢に乗り奮撃し一百五十級を獲る。義光記作百十五級。今從大全。按ずるに、大全一説を載せ云はく、会津隊長松本木工を斬ると。兼續の営堅守し動かず。城兵引き去る。

翌日、左衛門、前夜の戦敗を恥ぢ進み城を攻む。城兵火炮を飛ばし之を堅拒す。敵兵死傷するもの多し。左衛門兵を斂あつめ退く。既にして敵兵出で禾稼かかを暴く。越前其虚に乘じ兼續の陣を撃ち、多く首級を獲る。城に還らんと欲するに敵之を尾撃す。伊豆歩卒二百余人を城外に出し之を邀撃す。敵兵前車(軍)多く死し後軍猶予し進まず。越前兵を全うし城に入る。義光記 義光、上山城主里見越後を召し麾下軍監と為す。越後、其二子氏部(民)・主水及び草刈志摩等兵三千をして城を守らしむ。敵将上泉主水・前鋒穂村造酒允・椎野彌七郎、物見山麓に陣し上山城を攻めんと欲

す。主水後拒を為し山形の援路を扼おさふ。民部出で之を覘おさふ。敵兵の布陣前後相距つること遼遠たり。民部以為へらく、敵長途を歴、人馬疲労し陣中喧騒す。其部伍整はざるに乗り之を撃ちて走るべきなりと。乃ち志摩をして物見山の間道を歴敵陣の後にし出でしむ。民部開門大呼し出で戦ふ。敵軍披靡す。志摩銳兵三百を選び其後を邀せむ。喊かんとつ（ときの声をあげる）して進む。前後奮闘し之を大破す。城兵勝に乗り追撃し造酒允・弥七郎及び平巖石見・巖井備中等を斬る。敵兵狼狽し塹に墮ち塹たにに陥ち殆んど子遺けつ（のこり）無し。上泉主水前鋒敗るるを聞き之を馳せ救ふ。志摩物見山により銃矢を発し横撃し之を敗る。主水は会津の驍将なり。槍を揮ひ馳突力戦して死す。民部の兵金原七蔵年十七、其の首を獲る。城兵凡そ四百八十三級を斬り之を山形に送る。義光大いに民部の功を賞す。長子義康をして伊達政宗の援軍伊達吉岐・遠藤弥兵衛の兵合八千を率ゐしめ長谷堂城を救ふ。直江兼續の陣を距つること五十町。相持じすること数日。既にして関八ラの捷報至り、義光大

いに喜ぶ。以為へらく、敵兵の退走するは近きに在りと。自ら兵を将み山形を發す。上杉景勝も亦其党の関原に敗るるを聞き兼續をして兵を引き会津に還らしむ。兼續、水原親憲と退軍の方略を議る。親憲曰はく、「吾当に溝口左馬と前軍に在るべし。因りて山麓を守り然る後に諸隊長をして退軍せしめん」と。兼續之に後(從)ふ。

親憲・左馬前軍に赴き未だ陣列を成さざるに兼續の使既に至る。諸隊長階そろひ將に長谷堂城の兵援軍を引き去らんとす。義康兵を縦ち尾撃し大いに之を敗る。会津の兵死傷算ふる無し。二本松七郎時に十八歳 按ずるに、大全・合戦誌、七郎、右京と作す。勇士

一言集に拠れば此時七郎と称し後に右京を襲稱す。大全・合戦誌又曰はく、父右京亮義繼、伊達輝宗を執り質と為す。

政宗の殺す所と為る。右京二歳にして孤たり。往き景勝に依る。会津に長じ能く地利を諳しる。部兵百余人を指揮し險要に陣し追騎を邀撃す。手づから山形隊長天童弥七郎を斬り、其余我兵十余級を斬る。勇士一言集曰、七郎初軍欲先衆而進。老臣扣馬諫曰、大将不可輕進。指揮士卒然後進

馬。七郎晒(笑う)曰、大将怯懦士卒何能得戦。遂進鬪破山形之兵 溝口左馬槍を揮ひ我兵二人を殺す。

我兵退き走ること四五町。死者数十人。義光膂力有り、鉄棍を奮ひ衆を励まし還り闘ふ。敵兵又敗る。兼續・親憲山に拠りて陣す。日既に暮れ、義光陣を相對に張る。

其夜、親憲、兼續の營に至り之を責めて曰はく「さき 曩に約する所の如く吾左馬と陣を整へ然る後に退兵せば則ち以て万全たるべし。何ぞ兵を収むるの輕遽たるや」と。兼續復び与と較せず謝して曰はく「吾遇(過)てり」と。二人相議り隊毎に多く鳥銃を列し以て追騎を撃つ。翌日敵兵將に会津に帰らんとす。義光下令し之を追撃す。敵兵險に拠り銃を発す。追騎進む能はず。死者数百人。義光陣前に進み督戦す。鉛弾雨注す。従兵之を諫め退かしむ。義光聴かずして曰はく「我退かば孰たれか敢へて死力を出だし以て闘はん」と。勢甚だ猛厲れいたり。従兵死する者多し。義康山を隔て之を見、来援せんと欲するも路險しく騎すべからず。乃ち馬を舍すて歩み進む。二千余兵を率ゐ横から兼續の陣を衝く。長谷堂の援兵小国大善・谷地盛伯耆・川

熊讚岐守、兼續の陣後に繞出し之を掩撃す。兼続三面に兵を受け殆んど支ふる能はず。將に退かんとす。義光之を急撃す。敵兵敗走す。兼続又別山に抛り陣を整へ還り闘ふ。我兵少し却く。敢へて復び進まず。兩軍戦疲れ互いに退く。兼続、志茂治右衛門に牒報する能はず。兵を引き米澤に径還す。義光敵凡そ一千五百八十余級を斬る。士卒隕命いんめい(命をおとす)する者六百二十余人。遂に軍を斂め山形に還る。義光、近臣に謂ひて曰はく、「敵、関原の敗を聞き將に崩潰之れ暇いとまあらざらんとす。而して山城守、軍を馭し法有り。狼狽に至らず。謙信の遺風余烈、今に至り猶ほ存すと謂ふべきなり」と。家忠日記・徳川記・四家合考・松榮紀事皆書其大較。合戦誌・餘史各有異同。

今従大全・義光記。抛二書、九月十三日兼続攻旗屋城。十六日陣須賀澤山。其夜城兵襲春日左衛門之營。十七日戦于長谷堂。上泉主水戦死。二十五日義光登山形。二十九日義光与兼続接戦。十月朔兼続引兵還。四日志茂治右衛門降于

義光。今欲其事接統故不係月日是に先んじ、志茂治右衛門、谷地寒川江さがえを取る。無人の地に入るが如し。故塹(塁)を修築し之に抛り將に山形を攻めんとす。義光、志村伊豆に

方略を授けて曰はく、「治右衛門は会津の騎将なり。之を降さしめ以て我将と為すべし」と。伊豆、僧をして城に入れ之を説かしめて曰はく、「関原の戦に内府大捷し敵将皆敗走す。故に山城守復び戦ふ能はず兵を引き米澤に帰る。一价を馳せ以て使君に報ぜず。是れ使君を棄つるなり。孤城無援、今何ぞ待たんと欲す。来降するに如かず」と。治右衛門部兵を集め去就を議る。志茂美作固く之に降を勧む。

治右衛門之に従ひ遂に宗族従兵二千余人を率ゐ出降す。義光之を厚遇す。家忠日記・

大全・義光記・四家合考・合戦誌・餘史

臣按ずるに、関原記大全に宮腰秀興曰はく、長谷堂の戦、城主志村伊豆の部兵高橋伊賀、上杉景勝の監使丸山藤左衛門を斬る。景勝の軍監杉原親憲の族杉原彦左衛門時に新国莊吉を称し抛東国太平記彦左衛門名親清、親憲左衛門之姪也年尚ほ少し^{わか}。戦功群を挺き、親憲書を与へ之を褒む。伊加彦左衛門後に若狭少将酒井忠勝に仕ふ。叔父秀政も亦山形を去り忠勝に仕ふ。故に二人と交親し常に二人の長谷

堂の戦を談ずるを聞き、其梗概を大全に書く。或は此の戦孰れ勝つかを問ふ者有り。秀政之に応へて曰はく「余の父祖及び叔父皆上杉謙信に仕ふ。審らかに其用兵の略を聞く。節制他将に超ゆ。然れども長谷堂城を攻むるに及び春日左衛門夜戦し利を失ふ。穂村造酒允・椎野弥七郎敵を侮り首を授く。皆兵を知らざる者に似る。豈に景勝自ら陣に莅のそまざる。此輩懈弛する所有りて然しかるや。

然らず。兼續・親憲の過ちなり。旗屋城主江口五兵衛、食禄八千石、其兵一千を過ぐべからず。最上義光の命めいを用ゐず徒らに孤城を守りて死す。飯田播磨、

彼我の勢を審らかにせず力戦し元を喪ふ。皆称むるに足らざるなり。兼續の退軍あたに方り義光首を獲ること頗る多し。然れども山形の兵の死者も亦少なからず。

之を要するに勝敗軽重する所無きなり」と。臣おも謂ふに、秀政の論とう当たり。然れども其五兵衛・播磨の事に死するを論ずるは、利害を計較（比べて考える）するの言にして人臣の法と為すに足らず。五兵衛固より力敵すべからざるを知りて死を

避けず。播磨、矢桐相模をして敗兵を護らしめて敵を押し効死す。皆能く臣節を虧かかず、泯没びんぼつ（ほろびる）すべからざる者なり。

羽州仙北邑主小野寺遠江守、上杉景勝に党し土人を誘ひ乱を作す。同州六郷城主六郷政乗を攻め九月より是月上旬に至り数戦しばしばふ。政乗敵を斬ること頗る多し。城兵も亦死傷する者有り。遠江守関原の敗を聞き退走す。政乗大阪に至り捷を神祖に告ぐ。世子其功を褒め並び佩刀を賜ふ。大全 蒲生秀行の封疆ほうきょう（国境）会津に接す。景勝、下野監原（塩）・鹿沼の土人を誘ひ乱を作す。塩原の土寇将に起たたとす。秀行の郡吏神戸平左衛門之を聞き首謀者五人を捕へ之を磔す。余党悉く会津に奔る。

南山城主妹川縫殿助 妹川諸書或作宇川、又作五百川。国音転訛。今従合戦誌 に依り再び塩原を寇せめんと欲す。秀行の兵之を撃却す。又鹿沼の賊と戦ひ之を敗る。賊も関原の敗を聞き亦潰走す。大全・合戦誌 堀内安房守鳥羽城を出で新宮に還り城守す。和歌山城主

桑山重晴入道宗栄 剃髮叙法印号果法院 其子左近大夫貞晴・孫修理亮一晴をして 大全、以

一晴為重晴子。拋桑山系圖重晴長子九郎二郎、先父卒、其子一晴嗣。貞晴重晴第三子也。諸書或作左衛門佐。今從系

圖後更加賀守。父子名拋系圖 千余兵を率ゐ之を攻めしむ。杉若主殿頭も亦同じく来攻す。

安房守拒守し余力を残さず。既力(衍字)既にして毛利輝元・増田長盛以下党与皆帰降す

るを聞き、城を避りさ大野に出奔す。大全作熊野。今從桑山系圖 黒田如水既に大友義統を禽

へ垣見家純の富来城、熊谷直陳の安喜城を攻めんと欲す。実相寺を出で兵を安喜

に進む。安喜城の南北は海に臨み地勢險峻たり。直陣(陳)の叔父外記堅守し下らず。

如水力を悉くし之を攻む。城兵森孫左衛門・其弟孫右衛門密かに如水子(子)に通款す。

重臣毛利太兵衛 毛利初作母里。後更今字称但馬 曰はく「吾輩、熊谷外記と相喜(善)ばず。願

はくは出降せん。然らずんば火を城中に縦はなち以て内応を為さん」と。太兵衛、如

水の営に至り之を告ぐ。如水曰はく「彼の兄弟縦たとひ外記に憾うらみ有りと(君)も居に叛する

の理無し。不義の降は受くべからず。城を焼かば則ち敵と吾と死傷する者必ず多

し。皆許すべからず」と。部兵馬杉喜右衛門、外記と旧有り。如水、喜右衛門を

して書を外記に貽らしめて曰はく、「外おくに援軍無く中に離叛有り。城を授けて去るに如かず。城中一人たりとも殺さざるを誓ふ」と。外記之に従ひ出降す。如水、其臣黒田五郎右衛門・手塚孫太夫等をして城を成らしめ富来城に向かふ。黒田兵庫・毛利太兵衛前鋒を為す。如水城の西南に陣す。兵庫・太兵衛進み城を攻む。

家純の兄利右衛門の妻兄藤井九左衛門城を守る。合戦誌・餘史並云、家純之兄助左衛門其子九兵

衛驍勇善戦。合（今）從大全九左衛門夜百余兵を師ゐ兵庫の営を襲撃す。我兵死する者数

輩。兵庫衆を励まし其後を邀めんと欲す。九左衛門兵を収め城に入る。我兵鳥銃

を連放し外郭の（雉ち）ちよ雖堞（城壁上の低い垣）を撃破す。城兵羅城を固守す。如水、松本吉

右衛門を以て船監と為し舟を海上に泛べ往来を監る。夜敵船一艘有り。漂ひ至る。

成（成）船之を詰問す。答へて曰はく、「垣見和泉守大垣城に殺さる。帰り此の状を告ぐ」

と。如水之を縦ち城に入る。既にして家純の書史江良新右衛門大垣より来奔す。

我兵之を捕ふ。如水又之を縦ち城に入る。退兵し之を諭し降せしむ。利右衛門・

九左衛門出降を請ふ。毛利太兵衛曰はく「城兵夜黒田兵庫の営を斫うち悉く屠戮しして其怨を報かえすべし」と。如水笑ひて曰はく「彼我の厮殺しさつ（殺し合い）は戦陣の常、何の怨讐之れ有らんや。用兵の道は軍を全うするが上たり。宜しく亟やかに困を解き之を縦ち去らしむべし」と。是に於て利右衛門・九左衛門出降す。其余城中知名の士、如水皆之を召し臣と為す。上原新右衛門をして城を成らしむ。毛利高正処守の臣、日高郡隈城・球珠郡角牟禮城に拠る。大 全 日 高 作 日 田、球 珠 作 玫 珠 今 訂 之如水栗山四郎右衛門・母里与三兵衛・菅七郎兵衛等をして二城を攻めしめ之を降す。四郎右衛門、角牟禮城を囲み計を以て之を取る。進み隈城を攻む。城兵関原戦の敗を聞き出降す。四郎右衛門、與三兵衛・七郎兵衛をして城を成らしむ。豊後悉く平す。如水兵を引き還り捷を大阪に告ぐ。神祖書を賜ひ之を褒む。大 全。 拠 本 書 如 水

九月十七日攻安喜城、十九日熊谷外記出降。二十三日攻富来城、十月二日城兵出降。四日如水還中律（津）五日神祖

賜書。今欲事実接続。故不係日加藤清正熊本城（在）に左り。小西行長の宇土城を攻めんと欲し

谷崎権大夫を以て使と為し神祖に上書す。黒田如水と協謀し鎮西を平定すと告ぐ。

神祖悦び権大夫を召し親みづから鎮西の消息を問ふ。権大夫に謂ひて曰はく、「さき曩に我東

征す。清正諫めて曰はく、不可なり。昔(若)し東征せば則ち近江を過ぐる比禍乱必ず

起くと。其言果たしてあきら駭なり。智士と謂ふべきなり」と。大全。按ずるに、七月神祖の東

征に、清正藩に就き大阪に在らず。蓋し書を以て之を諫むるなり。今考する所無し。大全曰、清正初以其臣明石茂

兵衛為使。泊赤間関。被(彼)皆敵地。衆怪之詰問。茂兵衛誰(詐)書吾商人也。衆不聽。欲捕之。茂兵衛知不可免

走入仏寺投清正書於炉中(藪の下に火がつく)之。然後自殺。清正繼以権大夫為使。権大夫寸断清正書撚紙条為笠

繫。亦泊赤間関。衆怪之。権大夫曰、吾商客也。清(請)、勿怪。辞色懇款。衆聽之使過。抛(権)大夫故棄其笠於路

傍。衆取之進呼予(与力)之。権大夫謝去、至神祖之嘗。接続其書上之。附以備考 是に先んじ、大友義統、

木築城を攻む。細川忠興処守の臣松井康之・有吉立行、援を熊本に乞ふ。清正、

阪川忠兵衛・日下與介をして兵を率ゐしめ之を援く。親ら兵八千五百を將ゐ声言

し豊後に出師す。莊林隼人を以て軍監と為し熊本を発し本山嶺に至る。宇土城を

攻むるを下令す。大白山に屯し加藤百助・吉村橘左衛門を以て前鋒と為す。行長

の弟隼人及び南條元琢琢成作宅左衛門尉、名元清、伯州羽衣古城主豊後守宗勝庶長子弟勅兵衛某。以為嫡

子継宗勝。元清薙髮号元琢。其臣山田越中讒之於秀吉公、秀吉公使小西行長出之。故在宇土城。大全・慶元記並云、

左衛門佐元次子、勅兵衛元重弟。今拠南條系図訂之。宇土城を守る。清正の来攻を聞き街田(口)に出陣

し炬を列し之を待つ。清正、天明に之を攻むるを下令す。橘左衛門の部兵少壮た

る者鋭氣に乗り夜街口を攻め之を破る。城兵島津又助銃手を率ゐ之を拒ぐ。陣後

の人家を焼き以て其朋(明)に資す。銃を発すること雨の如し。我兵多く斃す。退きて

街口に陣す。加藤百助鹽田口に向かふ。三宅喜蔵、清正の命に忤(さ)ふを以て逐はる。

功を立て以て其罪を償はんと欲し夜鹽田口を過ぎ城下に至る。南條元琢出で吾軍

を偵(う)ふ。喜蔵槍を揮ひ其の面を傷つけ之と相搏つ。二人膂力有り。勝負未だ決せ

ざるに城兵数十人出で元琢を救ふ。清正之を見喜蔵を救はしむ。飯田角兵衛・莊

林隼人五六百人を率ゐ馳せ之を救ふ。元琢其城(迫)に過るを恐れ喜蔵を捨て城に入り

亟やかに門を闔づ。城兵夜百助の營を斫つ。阪川中兵衛・日下與介木築より還り百助の陣に在り。伊藤新五左衛門・佐久間角助と勇を奮ひ拒戦す。城兵還り引き去る。清正、三宅喜蔵の罪を釈し重く之を賞す。又飯田角兵衛能く喜蔵を救ひて城兵を却くを賞し並び采邑を増す。喜蔵後更称角兵衛門領五千石、角兵衛領七千石並為隊長 小西隼人密かに人をして書を齊へ八代城に至らしめ、処守小西若狭をして宇土城を援けしむ。清正其使を捕へ得。村民一人を募り其質を収め宇土城より来ると詐言せしむ。書を若狭に致す。若狭其書を見、隼人の署する所復び疑ひを容れず。亟やかに復書し期を告ぐ。村民之を清正に致す(届ける)。清正厚く村民を賞す。期至り隊將吉村左近・軍監相田六左衛門をして一千余兵を率ゐ之を邀撃せしむ。小川街口に至り八代の援兵と遇ふ。左近鳥銃を連発す。援兵大いに驚き敵將高瀬半左衛門衆を励まし進み闘ふ。左近・六左衛門之を急撃す。援軍支ふる能はず走り八代に還る。我兵進み宇土城に至る。外濠の上に竹牌を列し火箭・大銃を放つ。日夜

之を攻む。城兵悉力拒守す。関原大捷するに及び清正火箭を城中に射之を諭し降せしむ。小西隼人信疑相半し未だ復書する能はず。行長の敗兵走り宇土に還る。

清正之を縦ち城に入る。隼人使を清正の營に遣はして曰はく、「行長敗走す。事既に明白たり。吾小西若狭と同死し以て衆士の命に代へん。願はくは、君侯、二城の降兵を収め以て帳下に隸せよ。之をして妻子を^{かんよう}養（やしなう）せしめば、則ち恵孰れ焉に大ならん」と。清正之を義とし使を遣はし其死を監る。隼人・若狭自殺し、子城並び降る。清正、元琢以下城兵数百人を召し皆己が臣と為す。如水・清正攻

下諸城徳川記・合戦誌・餘史・慶長記・慶元記皆有其事而大全叙事詳悉。今從之。拠大全九月二十日清正発熊本。十月上旬隼人・若狭自殺。亦欲事實接続。故不係日。松栄紀事曰、宇土之戦清正自揮槍与南條元琢戦逐会（离）之。

以其有勇名、赦為己臣。合戦誌曰、諸書或云、元琢被虜誤ナリ。元琢被禽則隼人不能一日守城。故知其説（誤）。今從

大全・合戦誌 加藤與左衛門・並河金右衛門をして宇土城を^(成)戊らしめ、吉村橋左衛門・

提権右衛門をして八代城を戊らしめ兵を引き熊本に還る。大全〇年譜曰、加藤清正攻宇土城。

島津之兵困佐敷城。聞関原戦敗解困退去。大全曰、諸書式有此説。果然則清正必遣兵救之。而無其事。此蓋以文禄二年薩摩人梅北宮内左衛門奪佐敷城、誤為此時事。然年譜・関原始末記並有其事。故未敢遽為非也。遽為。今按ずるに、諸書文禄中の事を以て此時の事と為す。其れ時を誤れり。故に取らず。是に先んじ、有馬晴信・松浦法

印鎮信・大村新八郎後称丹後守・五嶋鈍玄、小西行長の檄を承り將に大「阪脱」に

赴かんとす。合戦誌・餘史宗義智疾と称し出でず。其臣柳川調信をして兵を將ゐ行か

しめ大全赤間関に至る。新八郎諸將に謂ひて田はく(目)「今関東を滅さんと欲するは

皆三成等の謀る所にして、決して秀頼卿の命に非ず。内府に属し以て功名を立つるに如かず。」と。諸將之を然りとし兵を引き各其藩に還る。神祖書を松浦鎮信に

賜ひ之を奨む。是に至り新八郎兵を分け清正を援け宇土城を攻む。清正之を大阪

に報す。神祖之を嘉す。合戦誌・餘史。賜書鎮信抛大全初め美濃苗木城主遠山久兵衛友政、

齋藤竜興に属するを以て織田信長の逐ふ所と為る。参州に流寓し麾下に仕ふ。東征に従駕す。三成拳兵するに及び城主川尻肥後守大阪に在るを聞き、苗木城を攻

むるを請ふ。神祖之を許す。友政喜び美濃に還る。土人其旧主たるを以て皆來從ふ。友政之を率ゐ城を攻め之を抜く。是に至り神祖其功を褒め城を友政に賜ひ復故す。合戦誌・餘史 巖村城主田丸具直大阪城に在り。其族主水をして城を守らしむ。美濃の人妻木雅樂助兵を率ゐ之を攻む。時に丹羽氏信參州伊保に在り。兵を遣はし之を援く。雅樂助ほしほし数主水と戦ひ之を敗る。其弟吉左衛門關東より馳せ歸り、神祖雅樂助に賜ふ所の書を齊へ諭す。戦功を励ますに高山寨を焼き土岐城を保つを以てす。雅樂助進み土岐城を攻めんと欲す。西軍に会ひ敗はいじく虜す。具直歸り降る。故に雅樂助兵を収め去る。神祖、具直の罪を釈し越後に流す。合戦記曰（○カ）、餘史曰、

具直亦從東征在小山警（嘗）。神祖諭關西諸將、使之各從其志。諸將無一叛者。独具直進曰、三成拳事如運螻螂之斧。然其（具）直与彼有旧。願江海之量、得許還國。拳兵与彼兵死則幸矣。神祖壯之親賜佩刀曰、宜亟西歸以拒我師。其

（具）直感戴而去、不敢出兵。但抛巖村城以示党於三成。及西軍敗具直意其必死、避城得罪。神祖流之。大全亦云、其（具）直從東征。神祖感其志賜佩刀（許）之西歸。而餘史之說頗涉今大今（涉夸大。今）從合戦誌。四家合考曰、

具直初欲從東征出巖村城。更留次嶺下樽井邑。其日石田三成書列勸其來歸。具直稱予留此二日逐次意西歸。拋巖村城

以叛乱平。神祖流之越後。其後剃髮号鄰松。附以備考 豊後岡城主中川秀成、宇喜多秀家・石田三

成に党す。故に黒田如水・加藤清正之に帰心を勧む。秀成聴かず。池田輝政其姻戚なり。使を遣はし秀家に三成関原に敗るるを告ぐ。亦帰正を勧む。秀成之に従ふ。大田一吉の臼杵城を攻め以て功効を著さんと欲す。臼杵城の地形堅固たり。

一吉、佐賀関を連守し海陸を扼^{おさ}へ寨ぐ。秀成、田原紹忍・古田喜太郎・甲斐五右

衛門等をして 合戦誌・餘史甲斐作榎野。蓋以国音相通近訛耳。今從大全 佐賀関を攻めしむ。一書、^(言)

久徳数馬・山田三左衛門をして之を援けしむ。二人舟にて佐賀関に至り紹忍等を迎撃し之を破る。秀成の臣中川平右衛門大阪より還り佐賀関に至る。紹忍・喜太郎と兵を合せ之を撃却す。土寇競集し其軍を邀む。平右衛門・紹忍・喜太郎鎌倉山に登り左義長鼻に抛り之を拒ぐ。秀成と隊を合せ臼杵城を攻めんと欲す。佐志生村の林中に伏兵有り起つ。神主作之允民兵を率ゐる鳥銃を連発す。秀成軍を回す。

有屋嶺の土寇蝟集し之を横撃す。牧勘右衛門以下戦死三十余人。一吉の兵浄土寺に抛り中川平右衛門進み之を攻む。敵兵拒闘す。甲斐五右衛門戦死す。秀成の兵又佐賀関に戦ひて敗る。平右衛門・紹忍戦死す。両日の戦死する者二百余人。 抛合

戦誌 既にして関原の捷報至る。一吉使を秀成の營に遣はして曰はく、「秀家・三成以下党与悉く敗亡すと聞く。今当に避去すべし。然れども思ふ所有り。願はくは黒田如水をして此に来らしめ然る後に城を授けん」と。秀成、如水に告状す。時に如水富来城を攻む。故に其弟兵庫を臼杵に遣はす。一吉の宰出で迎へ兵庫に謂ひて曰はく、「曩に中川修理大夫来攻すと雖へども堅守し下らず。斬獲頗る多し。城を修理大夫に捷(授)けば則ち世人必ず修理大夫此城を抜くと謂ふ。如水去(公)当時の名將たり。城を公(公)に授けん。復た憾む所無し。飛驒守惜む所は其の名のみ」と。言ひ畢りて歸る。一言(吉)及び城中の男女皆船を棄て城を出づ。兵庫城に入り遇(過)ぐるること一二日、城を秀成に授け中津に還る。 徳川記・合戦誌・餘史・慶元記、皆有其コト而大全叙事詳悉。

今從之。拋大全九月二十八日秀成發岡城十月二日戰于佐賀關。今欲事實連接。故不係日 初め日向飲肥城主伊^(飢)

藤祐兵大阪に在り。祐兵大全作祐隆今許(訂)之 神祖の東征に及び、井伊直政・榊原康政・

黒田長政に就き麾下に屬するを請ふ。神祖書を賜ひ之を嘉す。祐兵、兵を督し將

に従駕せんとするに罹疾し逗留す。使を黒田如水に遣はし其去留を問ふ。如水報し^{かえ}

て田はく、「宜しく本藩に帰り以て隣敵を勦^{ほろぼ}すべし」と。既にして祐兵疾劇し其子

左京祐慶^{後称修理大夫更出雲守}をして藩に還り兵を調べしむ。祐慶年甫十一。老臣を

して之を輔せしむ。祐兵竟に大阪に卒す。宮崎城主高橋元種大垣城に在り。秋月

種長・相良長毎と帰順するも、事未だ鎮西に達せず。故に先づ宮崎城を攻むるに

監使を黒田如水に乞ふ。時に如水安喜城を攻め城下に陣す。其臣宮川半右衛門を

遣はし之を監しむ。祐慶の臣稲津掃部兵数百を將ゐ宮崎城を攻め之を抜く。守將

榊藤平右衛門父子三人を斬り二百余級を獲る。退き、嶋津豊久の佐土原城を攻め

斬獲頗る多しと雖へども城堅く下らず。又進み薩摩兵と穆佐^{むかさ}・倉岡・高岡・真田・

山木・脇口等の地に山木或作山本未知孰是戦ひ四百余級を斬る。祐慶の兵戦死するも二百余人。祐慶平右衛門父子の首を如水の營に送る。如水之を検し其功を大阪に上る。神祖、祐兵の志操純壹(一)に、祐慶年少なるも功著しきを褒め之に父の封を襲はしむ。家忠日記・徳川記・大全・慶長記・合戦誌・餘史。掘合戦誌、九月晦稲津掃部攻宮崎城、十月上旬与

薩摩兵戦。故書于此 九鬼嘉隆、其子守隆と相持あいにし月を踰ゆ。其党関原に敗るるを聞き大いに沮なすむ。堀内安房守をして新宮に還らしめ、亦二子五郎七・五郎八をして亡げ去らしむ。(幸)其事(幸)豊田五郎右衛門と潜かに鳥羽城を出で答志島に匿る。合戦誌・餘史作

熊野。今従大全○大全曰、答志島在伊勢。見東鑑 守隆大阪に至り池田輝政に就く。己の軍功の賞を回し父の死罪を贖あがなはんと切に請ふ。神祖未だ頭には許さずと雖へども頗る其言を驩ただしとす。守隆之を聞き喜び使を答志島に遣はし之に報ず。使未だ至らざるに、十二日、五郎右衛門、嘉隆に自殺を迫る。首を持ち將に大阪に献ぜんとし星崎に至り守隆の使に遇ふ。之を如何いかにともする無し。守隆大いに悲慟し五郎右衛門を誅

す。家忠日記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事 前田利家大阪に在り。

十七日、神祖榊原康政を以て使と為し利勝の北国の軍功を賞し加賀能「美カ」・江沼二郡二十万石を増封す。弟利政のふたしご貳有るを責め、放ち能登を奪ひ利勝に加へ賜ふ。利勝藩に帰り此より加賀・能登・越中三州を統領す。利政京師に流寓す。家

忠日記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事 是に先んじ、細川忠興行營に詣づ。福智山城を攻め

以て小野木公郷、其父玄旨を攻むるの怨みを報かえさんと請ひて曰はく「路に龜山城

に由り之を攻め以て前田茂勝の罪を正さん」と。神祖之を許す。忠興喜び一子忠

隆・興秋の弟興元と兵二子(千)八百を將み福知山に向かふ。播州姫路城主木下右衛門

佐延俊肥後守家定第三子。大全作元次。今從之素神祖もとに帰心す。病と称し秀家・輝元の命に

從はず。是に至り兵四、五百を師ゐ忠興の軍に從ふ。忠興進み馬堀村に至る。龜

山城を距つること纔か十町。使を遣はし茂勝に謂ひて曰はく「宜しく亟やかに避去すべし。然らずんば之を攻め抜かん」と。茂勝、其宰小池清左衛門を中路に遣

はし迎へ之に謂ひて田はく「主膳正既に関東に通款す。故郷の父幽齋龜山城に高(目)す。請ふ、卿此に来たれ」と。既にして玄旨、三刀屋孝和と馬堀に至り面し茂勝帰款の状を告ぐ。忠興之を聞き茂勝をして来会せしむ。茂勝登時(すぐ)忠興の陣に来、先導を為し福智山を攻めんと請ふ。忠興之を許す。大全載一説曰、谷出羽守・藤懸參河

守・川勝右兵衛亦從忠興、以贖其罪 兵を分け二隊と為し進み蛇鼻江戸坂より福智山城を攻む。

城兵鳥銃を蛇鼻に列し之を拒ぐ。忠興之を急攻す。敵兵牙城に退き入る。時に公郷大阪に在り。忠興の城を攻むるを聞き馳せ歸るも入るを得ず。襜褕らんるを著魚藍きを担ひ賤夫と為り地に入るを得。

翌日、忠興將校を召して曰はく「城中の旌旗精彩を倍にす。此れ必ず公郷(来カ)東歸するなり。吾当に許を以て之を取るべし」と。乃ち使を城中に遣はし公郷に謂ひて曰はく「吾怨を報かえすに非ず。国に叛乱有らば必ず之を討つ。此れ藩臣の職なり。関原の戦に党与皆敗る。子し、城を守らんと欲するも誰か敢へて之を援けん。城を

避り罪を謝すに如かず。吾当に内府に以て寛者(宥)に処するを請ふべし」と。公郷之に従ひ髪を下し城を援(援)け出で民間に在り。忠興又使を遣はして曰はく「子の罪甚だ重し。吾命を請ふ能はず。宜しく自裁すべし」と。

十八日、公郷龜山浄土寺に入り自殺す。合戦誌曰、九月二十三日縫殿助出城入高野山、十月六日自殺。餘史作十一月六日。徳川記十一月十八日。大全・慶元記・松栄紀事不日。今、日従家忠日記・慶長記・細川家傳

録、事従大全○合戦誌又曰、神祖謂山岡道阿弥曰、忠興拔福智山城則恐多殺傷兇魁。已殪。何用多殺。子往説縫殿助降之。直(道)阿弥奉命至福智山諭之。公郷出降竟自殺。与大全異。附以備攻(致)忠興其臣飯川豊前・

前枚左馬允をして福智山城を成らしむ。大全 是に先んじ、神祖執政に謂ひて曰はく

「徳善院玄以款を我に輸かふと雖へども方に敵伏見城を攻め身は京師に在り。鳥居・内藤の死を恤あわれまず田邊大津の急難を救はず、終に一事たりとも其効を見るべき者無し。宜しく其封を奪ふべし」と。是に至り龜山城を収め父子を以て放去す。

北條氏勝・其子新左衛門繁廣をして龜山城を成らしむ。大全此非是日之事。今固(因)茂勝

事連尽（書）于此○松栄紀事曰、玄以与増田長盛同罪。然帰心于神祖告石田三成之密謀。且不署反從（徒）之連名。

故神祖積之不問。後屢召之。玄以称病不出。終於其家。此說或然也。然奪龜山城事事实明白。今從大全

十九日、世子京師を発し大阪に至る。家忠日記 鍋島直茂、立花宗茂の柳川城を攻め以て其子勝茂の罪を贖あがなはんと欲す。

是日、兵一万二千を將る筑後川を渡る。城を距つること三里。大善寺に陣す。前鋒鍋島七左衛門・鍋島平五郎五阪田に陣す。大全載一説曰、直茂在藩其子勝茂党于秀家・輝元。直

茂欲略寺澤志摩守唐津之地、使鍋島紀伊守・屋上刑部率数千人攻唐津。志摩守処守之臣山木三右衛門逆戦于駒啼攻却

之。直茂恐神祖聞之詰責、攻柳川贖其罪。附以備攻（致）宗茂、将佐を集め謂ひて曰はく「鍋島信

濃守、秀家・輝元に党す。兵敗れ本州に奔り還る。宜しく吾と刀（カ）を勦あわせ協謀し以て再挙を図るべし。而るに反り此に来攻す。必ず其父加賀守、内府に媚び信濃守の罪を贖はんと欲するなり。今当に出兵し自ら勝負を江上に決せんとすべし。彼をして吾疆圍を侵掠するを得ざらしめん」と。将佐諫めて曰はく「曩に大阪より

使を行勞(曹)に遣はし以て歸款を通ず。而るに主公自ら將に陣のぞに莅まんとす。其勢殆ど不可なり。宜しく將しゅうに命じ之を拒がしむべし。如し戦争有らば則ち誘かこけて曰ふべし、隣敵來侵す。已むを得ず出兵かんぎよ捍禦す(防ぐ)。而るに少壯の輩銳氣輕戦すれ則ち鹿(鹿ねが)はくは咎責を免かれんと。」と。宗茂之に従ひ重臣小野和泉鎮幸・立花右衛門大夫鎮實・立花成家・立花三大夫統春をして鎮實以下三名拋安東守經所書 銳(銃)守隊長安東五郎右衛門・石松安兵衛等一千余兵を率ゐ之を迎撃せしむ。五郎右衛門・安兵衛銃を發し挑戦す。前に溝渠有り交戦するを得ず。日將に暮れんとす。鎮幸・成家兵を収め城に還る。

二十日黎明、鎮幸・鎮實・五郎右衛門・安兵衛・立花統春・新田平右衛門等拋大全、

平右衛門・新田義貞之裔、右衛門督義照孫、遠江守某第二子 一千三百余人又江上村に出づ。五郎右

衛門・安兵衛・千手六之允進み我軍の前鋒を撃ち之を破る。統春、部安(兵)を率ゐ突戦し我軍三隊退き走る。中村勘兵衛・森弥七等戦死するもの頗る多し。統春勝に

乗り単騎進み鍋島七兵衛門の陣を犯す。我兵槍を攢め之を刺殺す。直茂、隊將後藤左衛門・後藤喜三郎をして鐘江を渡り八院村の西に出で鳥銃を連発せしむ。千手六之允驚き走る。我兵勢に乗り還り戦ひ之を大破し五郎右衛門・安兵衛・奈良右京・井手與二兵衛等数輩を斬る。鎮實隊後に在り。前隊の急を救ふ為に横撃し我陣を破る。退走すること三町ばかり、我兵其後を邀撃し之を破る。鎮実及其子善二郎親雄を斬る。安東守級（経力）所書 士氣大いに奮ひ小野鎮幸の陣に進撃しまた之を破る。鎮幸重创す。従兵戦死し僅かに千四五人存するのみ。立花家成水田口を守り以て黒田如水に備ふ。謀奔り江上の戦に將士多死するを告ぐ。家成顧み士卒に謂ひて曰はく「將に軍在らんとす。専断は可なり。如水の兵未だ至らず。我軍の急を救はざるべからず」と。争ひ馳せ之に赴く。江上村の北に出で急ぎ鳥銃を発す。家成馬上に槍を輝ひ衆を励まし競ひ進む。我兵披靡し又退くこと五町ばかり。然れども我兵衆多く銃を発し西と注ぐ。家成靡を揮ひ與を収む。後藤善二

郎八院村より銃を連発す。家成の類に中り重創し馬を墜つ。従兵之を扶けて去る。
鎮幸驍勇にして結髪し従軍す。被創すること六十七。

是日、最も重し。家成の救ふ所と為らず。幾んど免るる能はず。二人兵を引き柳

川城に還る。合戦誌・餘史・慶元記皆載江上之戦。而大全叙事最詳。今従之毛利吉岐守勝信、豊前小

倉城に在り。其子勝永後称 豊前守反徒に党するなり。南宮山・関原の戦に敗れ江州

に走り加藤嘉明に就き降を乞ふ。黒田如水、安喜・富来二城を抜き中津に還り土

馬を休む。出で小倉城を攻む。勝信、勝永を以て帰正せしめ城を如水に授けて去

る。如水兵を置き之を戍る。神祖、勝信と旧有るを以て父子の罪を釈し山内一豊

をして之を幽せしむ。大全曰、勝信之子抛小倉城。使其宰毛利九左衛門子吉十郎守香春城。吉十郎有憾于

勝信叛降。如水以為先鋒攻小倉城。如水遣使城中勸其帰降。勝信従之。削髪号一齊授城而去。如水置兵城（戍）城。

而不書勝永之存亡。按ずるに、十九年勝永土佐より大坂城に入る。力戦し著名なり。明年秀頼に殉死す。合戦誌載す

所事実頗る詳し。今之に従ふ如水將に柳川に赴かんとし藤山に屯すること数日。藤山在筑後三

「」郡 陣を水田村に移し江上軍散るを聞く。小野鎮幸・立花家成柳川城に還り、使を大善寺に遣はし鍋島直茂に兵を弭やむを諭す。直茂前軍を引き大善寺に入る。

加藤清正宇土より還り亦筑後を卒定(平)せんと欲す。一千余人を率ゐる瀬高村に陣す。抛

大全、水田村距柳川城二里半。瀬高村去城二里。如水・清正相議り宗茂をして避去せしめんと欲

す。使を遣はし宗茂の宰立花賢賀を召し瀬高に至らしむ。如水・清正、賢賀に謂

ひて曰はく「宗茂、城を出で従軍し吾曹と薩摩を攻めば則ち其罪を償ふべく庶ねがは

ん」と。賢賀城に還り其吉(言)を告げ宗茂に講和を勧む。薦野親次、方に柳川に帰り

告ぐ。神祖其罪を優容す。宗茂意を帰降に次とめ近臣五、六人と城を出で清正の営

に至る。時に営中馬逸れ騷擾す。宗茂の拳止自若たり。清正急ぎ使を城中に遣は

す。宗茂の従者と城に入る。馬逸れ佗(他)虞無きを以て諭す。城兵、清正の営大いに諫さわ

ぐを見以為へらく、宗茂誘殺せらると。皆営を斫うちて死せんと欲し既に羅城を出

づ。清正の使馳せ其故を告ぐ。城兵始めて安んじ清正の敏捷(捷)に威服し座定む。清

正、宗茂に謂ひて曰はく「足下、脅従（おそれ従う）にして首謀するものに非ず。内府必ず之を鑿茹（かんじょしらべる）す。宜しく吾曹に従ひ薩摩を征討し以て内府の涵容を来む（求）べし」と。宗茂曰はく「大老奉行秀頼を擁戴するに委託し兵馬を發せんと欲す。

吾難応欲出軍（*意味不明）関原に戦ふを得ず。中道に兵を還し竟に成す所無し。甚だ羞づべきなり。諸君能く料れ。秀家・輝元其余諸将事を挙げ必ず成す能はず、専ら内府の為に禍乱を戡定（かんでい勝って平定する）す。殆んど下愚の及ぶ所に非ず。請ふ、諸君の処分に従はん」と。清正喜び使を如水・直茂の營に遣はし其言を告ぐ。駄馬五百疋・役丁一千人を點し兵士をして宗茂を熊本に護送せしむ。加藤美作柳川城を戍る。徳川記・慶長記・関原軍記・合戦誌・餘史・慶元記皆有其事。而大全叙事詳悉。今従之。抛大全、二十

日如水移陣水田、二十四日宗茂出城亦欲事实連接。故不係日。○大全曰、清正善遇宗茂。構館于玉名郡高瀬邑使宗茂居之、給俸其臣一百人。使居測近。号柳川町。給一千人。月稍於宗茂。其後宗茂往江戸請蒙沛宥 初め毛利秀包久留米城を出で大阪に赴く。其妻及び四子を処守桂民部に説きて曰はく「西兵利

あらず、敵軍来攻す。宜しく守禦の術を尽くすべし。力屈せば則ち吾妻子を殺し城を枕にして死せよ。若し黒田如水此に来ば則ち当に城を援けて去るべし」と。
是に至り如水、清正と議り如水の弟図書・清正の臣和田備中を久留米に遣はす。民部に城を授けよと諭す。民部、秀包の命に従ひ其妻子を護り城を図書・備中に授けて去る。図書牙城を成り、備中羅城を成る。清正使を山下城主筑紫廣門拠大全

山下城在筑後下妻郡に遣はし立花宗茂と薩摩に従軍す。廣門城を授けて去る。清正、加

藤百助をして城を成らしむ。大全本書曰、是從清正招廣門於熊本、給三百人。月稍。廣門剃髮号「脱」庵。

卒後召其子主水于関東隸麾下石川頼明、立花宗茂に従ひ大津城を攻め之を抜く。其党の関

原に敗るるを聞き逃げ脇阪安治の家に至り主(生)を乞ふ。安治、死を免ずるを井伊直

政に講(請)ふ。直政聴かずして曰はく「掃部助、内府公甚だ悪む所なり。宜しく速や

かに死に就くべし」と。頼明自殺す。按ずるに、天正十三年頼明の父伯耆守数臣(正)大阪に出奔す。

故に神祖之を悪む原隠岐守・河尻肥後守も亦相継ぎ自殺す。司小野木公郷・石川頼明

の首、三条河原に梟せらる。家忠日記・合戦誌・慶元記・餘史・松栄紀事 合戦誌曰三成・惠瓊・行長・

公郷・頼明・隱岐守・肥後守皆為罪魁故梟首止此七人。其余反從誅戮。自殺者皆不梟首 石河光吉犬山城を出

で朝熊に至る。兵纔かに百騎ばかり。還り関原に戦ふ。軍敗れ朽木谷に走り京師

に潜匿す。其後流寓し池田輝政に就き生を乞ふ。輝政哀訴し神祖其罪を釈し之を

放つ。合戦誌・関原軍記・餘史三書並曰、光吉落髪為市人号宗林。终于京師口。駿府記十九年十二月五日書曰、石

河備前入道来謁、関原記「乱」平、流落京師。大阪記（ママ）與（ママ）不入城。故神祖許其謁見。四家合考曰、石

河備前守性甚貪婪、善財捨（ママ）克邑里。民不堪命。部下士皆離散、不能守城。其子諫之、不聽遂自殺。今扱上三

書光吉流寓為市人則其書（ママ）不言（ママ）、忌（ママ）可以為士者之成（ママ）矣

二十七日、神祖罹疾す。

二十八日、神祖第九子五郎太麻呂、大阪西城に生まる。長じて名義利、後に義直

と更ふ。家忠日記・松栄紀事。從二位尾張大納言敬公見（是）也。所生志水氏甲斐守宗清女、後為尼号相應院

二十九日、神祖疾瘳^いゆ。将士登城し之を賀す。家忠日記・松栄紀事 方に是時、世子と兄

參河守秀康・弟下野守忠吉と、皆大阪に在り。

一日、神祖、大久保忠鄰を召して曰はく、「三子孰れ適嗣と為す」と。忠鄰対へて曰はく、「世子の位望（地位と人望）已に重し。臣未だ嘗て其の過ち有るを見ず。宜しく動揺すべからず」と。神祖（黙）點す。他日井伊直政・榊原康政・本多忠勝・平巖親吉・本多正信及び忠鄰を召し又之を問ふ。正信等敢へて輒すなわち対こたへず退きて其可否を議る。正信曰はく、「參河守殿の勇武絶倫たり。宜しく家嗣たるべし」と。直政・忠勝・親吉各見る所を陳のぶ。忠鄰曰はく、「三公子皆閣下の所生たり。弓馬の芸は論たふる所に非ざるなり。世子智勇兼備す。基業を付託するは此に非ずは則ち不可なり」と。康政曰はく、「誠に子の言ふ所の如し」と。既にして六人見けんに入るい。神祖先づ正信をして発言せしむ。正信対ふること前議の如し。次いで忠鄰に問ふも亦前議の如し。神祖正信と論難せしむ。正信田（目）はく、「參河守殿適嗣たり。断じて疑ふべき無し。」と。忠鄰前議に固執して曰はく、「乱に戡かち敵に克つは、勇武先たり。天

下を平定するは文徳を備ふるに非ずは必ず不可なり。臣、世子に事つかへ歲月既に久し。保佑の私無きに非ざれども（お育てした私情が無いわけではないが）基業を授受するに至れば則ち国家長久の大計、豈に私を挟さしかみ偏重する所有らんや」と。固（固）て懷中を探り誓書之を上たてまつる。神祖曰はく、「卿等且ひまく退け。吾將まさに思はんとす」と。経ること一、二日。又六人を召して曰はく、「曷なほに忠鄰の言ふ所理有り。吾継嗣已に定まれり」と。六人同辞に曰はく、「鈞命（君命）甚だ善し」と。拝謝して出づ。家嗣遂に定む。大久保家記・大全

臣按ずるに、是に先んじ、台廟既に世子たり。是に至り神祖、執政に諮はかり訪ぬるは蓋し深慮有るなり。天正十三年青山忠成を以て長麻呂君の傳ふと為す。抱負の臣を置けば、則ち擁立の命めい無きと雖へども其の世子と為るは是時に在り。十年京師に入るに及び、関白秀吉公親みづから首服を加へ以て名諱を捜せば、則ち其位望の重きことも亦見るべし。況んや台廟の天資仁孝・謀略宏遠たり。位従三

位に隆し官中納言に至る。撫軍監国、世子の事に非ざるは莫し。問安視膳（太子が

常に氣くばりをする）、実に主鬘（天与の君主）の器たり。然れば大久保加賀守忠任、太田

備中守資宗に牒する所の大久保家譜及び関原記大全に拠れば、世子と立て為す

は、本年に在る似し。今其時勢を審かにす。神祖、執政に謀るは国本を動揺せ

さすに非ずして、人心の嚮く所を觀んと欲すればなり。誠に宗廟社稷の大計、

万世無窮の重典。庶はくは觀る者をして考拠する所有らしめよ。

十一月十六日、世子大坂を出で伏見に入る。

是日、南都興福寺に旧封に依り一万五千石の印章を賜ふ。

十八日、世子、朝ちゆうに入る。傳ふ青山忠成從五位下を授けられ播磨守と為る。家忠日記 山

口重政從五位下に叙せられ但馬守と為る。鷲峯文集山口重政碑本書有月無日。今附于此 黒田如

水・加藤清正・鍋島直茂其余鎮西の諸將、島津惟新を討たんと欲し兵を率ゐ佐敷

水股に至る。肥後地名 清正以て其前軍を為し薩摩に先に入らんと欲す。如水書を貽

り之を止む。清正之に従ひ水股に屯す。是日、神祖書を如水・清正・直茂に賜ひ兵を戢む。おさ諸將兵を引き各其藩に帰る。大全 神祖、亀井茲矩を因幡に遣はし宮部兵部少輔の鳥取城を取る。播磨小鹽城主齋村左兵衛則継 大金（全）作赤松太兵衛廣範。餘史・

慶元記作赤松左兵衛廣秀。合戦誌作齋村左兵衛。而無名。按ずるに、齋村、赤松氏の別称にて即ち一人なり。今播州

斑鳩寺過去帳に抛り之を訂す。合戦誌小監作濱田。今從大全。兵部少輔病狂失封。見上文九月 雅もとより神祖に帰款

せんと欲す。而れども大阪の徵発に従ひ田辺城を攻め、帰り本藩に在り。茲矩鳥取に赴くを聞き功を立て以て罪を贖はんと欲す。兵部少輔の処守の臣敢へて拒がず。茲矩城を授けて去る。故に則継效（功）を立つる所無し。神祖、其宇喜多秀家の妹天（夫）たるを以て茲矩に命じ之を殺す。

二十九日、則継、鳥取に於て自殺す。赤松氏の統是に至りて絶ゆ。今戦記（合戦誌力）。

餘史・慶元記並曰、亀井武蔵守奉命定山陰道。給濱田城主齋村左兵衛曰、子能与我勳力狗地則上其功於内府公、以領

采邑。不然攻之。左兵衛從之攻鳥取城。兵部少輔処守之臣多賀三郎右衛門・土井一玄等屢出戦。茲矩不能下。既而兵

部少輔手書諭之。故三郎右衛門・一玄致城於二人而去。武藏守謂左兵衛曰、吾雖固請内府公不見聽。子宜引決。左兵衛自殺。武藏守以為己功。按ずるに、処守の臣拒戦する、他書載せざる所。茲矩も亦作すべからず。此れ鄙人の行。

今從大全 長曾我部盛親、界津より大阪に至り土佐に遁げ歸る。其臣立石助兵衛・横山新兵衛を「大阪カ」に留め井伊直政に就き以て其罪を謝す。神祖之を釈す。盛親をして大阪に來以て陳謝せしむ。直政旨を伝ふ。盛親將に大阪に赴かんとす。盛親庶兄有り。津野孫二郎と曰ふ。父元親、盛親を以て嗣と為す。孫二郎もつと雅神祖に歸心す。盛親の近臣久武内蔵之助、盛親に謂ひて曰はく「孫二郎殿、藤堂高虎と交最も親し。高虎之を汲引し(登用する)土佐半州を以て賜ふは必なり。宜しく之をして自殺せしめ然る後に召しに就くべし」と。盛親之を然りとし孫二郎に迫り自殺せしむ。

是月、盛親大阪に至り天満学校寺に寓す。神祖之を擾容(優)し伏見故第に居せしむ。藤堂高虎を召し津野孫二郎いず安くに在ると問ふ。高虎対へて曰はく「盛親迫り自殺

せしむ」と。神祖大いに怒り盛親の封を奪ひ罪死に当つ。直政哀訴し生を乞ふ。

盛親の第に至り諭して曰はく「内府の怒り甚だし。当に本州（本国）を以て我に付くべし」と。盛親之に従ふ。直政、部将鈴木重好を土佐に遣はし盛親も亦其臣を遣はす。処守の臣を諭し城を重好に授け高野山に入る。披蒯し祐夢と号す。大全・合戦

誌諸書祐或作幽。国音相通○関原軍記・餘史並曰、盛親歸土佐欲再挙兵。神祖使山内一豊・加藤嘉明・蜂須賀至鎮討

之。三将率兵入土佐。故盛親乞降。按ずるに、神祖務めて兵を弭め海内を安集せしめんと欲す。盛親敗亡の余り其余を動揺するに足らず。諸書三将に命ずの文無し。故に取らず 重好兵三千余人を従へ大阪を発し土佐

府城浦戸に至る。盛親の歩兵に一鎮具足と号する有り。其党蕃衍（勢力を広げる）し料師（魁帥）

竹田宗左衛門・吉川善介・徳井佐龜之助等相聚り謀反す。舟三百艘を列し重好を

拒ぎ内れず。鳥銃を連発し時既に夜なり。重好炬かがりを舳じくろ（へさきとも）に焼たき人を

して高声に呼ばはらしめて曰はく「我御命にて来たり。汝曹、船を近づけ之を聴け」と。賊や稍走にげ使を遣はし重好を導き雪蹊寺に入る。衆を（尽）書くし来困するもの

凡そ五千七百人 鈴木重好傳本書作一万余人。疑大多。今從家忠日記・大全・合戰誌・慶元誌（記） 重好に

迫りて曰はく「土佐を中分し其半を以て宮内少輔に賜へ。否ならずんば則ち敢へて命

を受けず」と。重好曰はく「公命此に及ばず。我こ焉に之を専らにするを得。縦ひ

汝輩と聞（闘）死すとも従ふ能はざるなり」と。賊従ひ又請ひて曰はく「然らば則ち一

郡或は十邑を給へ。子（宜しく）豈に旨を取る「べし」と。盛親処守の臣既に盛親の命を聞き

密かに重好と通謀し議り賊を討つ。故に重好其請ふを許さずと雖へども、遽（に）かに

は之を繼（絶）たず依違（い）（ぐずぐずする）として延期す。重好記傳 関原の反党松浦安大夫・伊

藤彦兵衛・毛利秀包・木下左京亮皆流に処せらる。赤屋久兵衛・稻葉甲斐守・稻

葉右近降すると雖へども罪重きを以て杖（放）たる。小野寺孫七郎・多賀出雲守・木下

周防守・木下美作守・杉若越後守・横濱民部少輔・寺田播磨守・木村弥一右衛門・

垣屋隱岐守・岸田伯耆守・早川主馬首・南條中務大輔 名闕。難波戰記曰、中務大輔元明子掬

南條系図、無元明者。慶元記作勘兵衛之子、元琢之姪。為是。服部土佐守・菅平右衛門・糟屋内膳

正・高田薩摩守・別處豊後守・三洲大和守・秋田助左衛門・矢部豊後守・伊藤加賀守・駒井中務等身大阪に在り戦場に赴かずと雖へども反徒と通謀す。故に籍を削り之を攻む。生駒修理亮・藤懸永勝・谷衡女(好)・小松秀政(其)・ソノ子大和守吉政後

襲称播磨守・孫大隅守三尹実秀政子、吉政弟、遠江守秀家子養之・杉原長房・建部内匠頭寄徳・

山崎家盛・片桐且元・織田信包・織田信高・毛利高正・宮城丹後守・川勝信濃守・

新莊越前守直定初称新三郎。駿河守直頼子。叙従五位下任越前守・蒔田権之助等も亦大阪に在

りと雖へども潜かに関東に帰款す。故に采邑を領すること皆故もとの如し。池田伊豫

守・山崎右京亮・丹羽長正・溝江大炊助・赤澤備後守等関原に戦ひ兵敗れ皆亡げ

去る。反党悉く敗る。合戦誌

十二月、後陽成帝、第二皇子政仁を以て親王と為す。後水尾帝所生近衛関白前久の

女。諱前子、「号」中和門院。松栄紀事作信尹女誤。今堀公卿補任許之(訂)帝、皇子を鐘愛し天位を

伝へんと欲す。是に先んじ、中山大納言藤原親綱の女第一皇子良仁を生む。親綱大納

言秀親子。良仁後披剃入仁和寺号覺深法親王 菊亭右大臣晴秀 左大臣公彦子 親綱及び徳善院玄以と

謀り、関白秀吉に親王と為すを請ふ。故に帝其志を遂ぐる能はず。是に至り密か

に近侍を大坂に遣はし神祖と議り皇嗣と定む。神祖もとより雅良仁親王を立つるを以て可

となさずして曰はく「子を知るは父に如くは莫し。第一・第二皇子皆瓊けいし枝玉葉（皇

族の子孫）簡（決定文書）は帝心に在り。然れども子、母を以て責きこと古今の通誼たり。

宜しく第二皇子を以て儲貳ちよじ（皇太子）と為すべし。庶ねがはくは天人允協（下）いんきょう（謹んで受け入れる）

たらん」と。帝大いに喜び議り遂に定む。松栄紀事 神祖下令し真田昌幸及び其少子

信仍を討つ。長子信幸哀訴し己の賞を回し父の死罪を贖ふを請ふ。神祖、信幸の

功大なるを以て之を許す。

十三日、昌幸・信仍上田城を出で高野山に入る。昌幸雑染し一翁千雪と号す。 創業

記・家忠日記・合戦誌・餘史・松栄紀事、信幸賜上田城。見下文神祖、井伊直政・本多忠勝・榊原康

政・本多正信・大久保忠鄰をして世子に問はしむ。「今州郡を功有る諸將に頒たん

と欲す。宜しく先づ根本の地を定め以て大城と為すべし。関東・関西二者孰れ可なる」と。世子対へて曰はく「小子何ぞ知らん。唯だ或算^(成)（出来上がった案）を仰ぐのみ」と。神祖喜び乃ち江戸城を大城と為すを定め、豊臣秀頼をして大阪城に居し河内・摂津二国を管^(管)せしむ。越前を以て参河守秀康に封じ、尾張を下野守忠吉に。

播磨を池田輝政に賜ひ、美作・備前を豊臣秀秋に、安藝・備後を福島正則に、出

雲・隠岐を堀尾吉晴及び其子忠氏に、伯耆を中村一学忠一に、松榮紀事曰、此時賜松平氏

任伯耆守筑前を黒田長政に賜ひ、豊前を細川忠興に増封し、豊後・木築故の如し。

紀伊を浅野幸長に。左京大夫幸長後更狂（任）紀伊守肥後の半を加藤清正に増封す。土佐

を山之内一豊に、若狭を京極高次に、丹後を京極高知に、筑後を田中吉政に、伊豫の半を加藤嘉明に。松山城に徙居す。其半を藤堂高虎に。今張城に徙居す。各

十万石を増封す。嘉明・高虎元是各食十万石。通前二十万石阿波を蜂須賀至鎮に、讃岐を生駒

一正に、肥前を鍋島勝茂に、飛騨を金森可重に、因幡鳥取を池田長吉に、丹波福

智山を有馬豊氏に、美濃高須を徳永法印寿昌に、備中庭瀬を戸川達安に、伊勢神戸を一柳直盛に。松阪を古田重恒に、安濃津を富田知信に、信濃上田を眞田信幸に、増五万石。肥前四万石を割り寺澤廣高に増封す。美濃二万石を以て西尾光放に増封す。創業記・家忠日記・大全・合戦誌・餘史・松栄紀事 木下延俊を豊後口出(目)に移封す。三万石を食む。寛永系図・餘史 美濃郷邑を木曾諸士に割与す。筒井定次、伊賀上野城を敵に奪はると雖へども戦功有るを以て城を賜ふこと故もとに復す。将士皆安堵す。家忠

日記・大全・合戦誌・松栄紀事。按ずるに、諸將に封ずる事必ずしも戦と同時にならず。他年封拜する者有り。諸書事に因り連書す。今之に従ふ 是よりこ闔国こ(全国)一統天下の諸侯皆、事を神祖に仰ぐ。豊臣秀

吉将士に賜ふ所の羽柴氏悉く本氏に復す。大全。按ずるに、伊達政宗羽柴氏に更へ松平氏を賜ふ。

下文十三年十二月に見ゆ。未だ必ずしも此時悉く本氏に復せず。蓋し大全其梗概を言ふなり。松平忠頼をして

美濃金山城を成らしめ采邑一万五千石を増す。内藤信成、同州巖村城を成(成)り、戸田高次、越前丸岡城を成る。高臺院の宰小堀政次を召し麾下に仕へしめ一万石を

賜ひ備中松山城を成らしむ。大久保忠常、加賀守と為り、土屋忠直民部少輔と為り、並び従五位下に叙せらる。家忠日記 鈴木重好土佐に在り。五十余日、日夜運策す。長曾我部盛親の故將桑名弥次兵衛一孝と合謀し賊を勦す。一孝元和元年矢尾堤之戰。

家忠日記作親氏。今從城所友仙訂正 盛親の旧臣南岡四郎兵衛・須久毛善左衛門等皆之に応じ

晦かい（姿をくらます）す。大全作朔。今從鈴木重好傳 重好、一孝・四郎兵衛等と兵を率ゐ賊徒を

攻め大いに之を破る。賊師吉川善介・徳井佐龜之助及び其党三百四十三人を斬り

舟にて其首を大阪に運ぶ。井伊直政之をたてまつ上る。神祖其功を褒め重好に申命（徹底し

て命じる）して曰はく、「土佐を綏撫（おちつかせる）せば須らく山内対馬守に授けて歸る

べし」と。重好傳 是月、黒田如水・加藤清正大阪に来謁す。時の人、以て鎮西を平

定するはすべて二人に在りて、如水の謀略其功最大たりと為す。合戦誌・松栄紀事 家

忠日記、以如水来謁大阪、係十一月十八日。抛大全十八日。神祖賜書如水・清正・鍋島直茂、隨其便宜使収鎮而（西

諸城、故係是月。家忠日記誤矣 神祖特に如水の功を重んじ朝廷に奏し官爵を授け畿甸でん（畿内）

の地を以て封し天下の政事を諮訪^{（しほう）}（相談する）せんと欲す。如水辞して曰はく、「鈞命^{（主命）}甚だ重し。然れども年老い多病、精力裏耗^{（衰）}し任事に堪へず。賊息^{（賊）}甲斐守筑前国を賜ふ。甲斐守の養ふ所と為り、以て余年を楽しまば志願畢れり。功名富貴一つとして期する所無し」と。神祖之を賢とし、之をして優游と身を終へしむ。 大全

臣按ずるに、宮腰秀興曰はく、「黒田如水の勇略群を超え智謀絶倫たり。初め秀吉公、如水を以て謀主と為し、攻むれば必ず下し戦へば必ず克つ。其功与京に^{（京中に）}之れ莫^{（な）}し。而るに秀吉公其才を忌み終に之を大国を以て封ぜず。如水幾^{（き）}を見て作^{（た）}ち^{（易経）}、致仕し中津城に在り。石田三成事を挙ぐるに及び専ら神祖の為に西陲^{（すい）}（辺）を經略す。首^{（はじ）}め竹中伊豆守を勧め関東に帰せしむ。大友義統を禽^{（とら）}へ安喜・富来・臼杵・隈角・牟禮等諸城を降す。豊後を平定し豊前・筑後に至り、小倉・香春・久留米・柳川四城を取る。大田一吉・立花宗茂に勧め之をして帰順せしむ。將に薩摩を攻めんとし肥後に至り島津龍伯の帰降するを聞く。諸將

を諭し戦を止め神祖の命を待つ。然る後に班師す（軍を返す）。九州を戡定（かんでい平定）するは皆如水一人の力なり。神祖其功を賞め之を好爵を以て靡つなぎ巖邑を以て封ぜんと欲す。而れども一つとして受くる所無し。其の京師に在るや東山鹿谷の側に寓す。参河守秀康卿以下諸侯大夫其門に輻輳（集まる）し跋慕景仰し尋ぬ。筑前に還り博多に居す。福岡城の修築功竣するに及び羅城そうかい爽塏（土地高くさわやか）たるを択び以て菟裘（ときゆう隱居地）を嘗む。恬退（てんたい欲がない）間静以て余年を終おふ。相伝に台徳公近臣に謂ひて曰はく「黒田如水、当世の張良なり」と。嗣子長政の関原大功は世に其知る所なり。天下一統、偃武えん修文に及び武事を以て人に矜えんらず。謹厚奉上、謙恭士に下る（立派な人物にへり下る）。福島正則、伊奈図書を枉殺（非道に殺す）するが如きは絶えて為さざる所なり。小瀬道喜太閤記を著すに、諸家の記載を購求す。長政の重臣みな僉曰はく「宜しく祖者以来の武功を録し之を書に著さしむべし。」と。長政曰はく「凡そ士たるもの立（僅）怒敵皆公家こうかの為にして私を嘗み求

名を為すに非ざるなり。大平の世に武功を衒耀げんようするは吾志に非ざるなり」と。
終に其諸もろもろを許さず。故に太閤記黒田家の事を書くに率闕略多し。如水父子明
哲に身を保つ者と謂ふべきなり。臣謂おもふに、戦争の世に勇略超群、問ふに、或
は之有らん。明哲保身絶えて其人無し。如水海内麻沸まふつ（動乱がおこる）の時に当り奮
ひ身を顧みず。九州既に平すに及び韜光自晦とうこう（才徳をかくす）す。台廟たまの、「方に之
れ子房（張良）」、殆んど媿（き）づる所無し。秀興、居狭を去り筑前に在り。其如水父
子を論じ恐らくは溢美いつび（ほめ過ぎ）の言有らん。而れども之を載籍に質ただすに実に論
ずる所の如し。干戈かんか既に戦あさむ。長政、学文に意有り。数羅山しばしばを延ひく。其講説を
聴き賞し世に延ず。国の藩屏まことを為す、良に以ゆえあらんや。

是歳、足利学校僧三要をして孔子家語・武経七書・貞観政要を板刻し世に行はし
む。家忠日記・松榮紀事曰（○カ）、創業記十二年、年尾書曰、近年京都工人「書於梓謂之摺本。末代重宝也。」

蓋前此所未有、故附于此

烈祖成績卷之十終